

—天と地のはざまにて星を仰ぐ—

# 神々の 憂いと悲しみ

千乃裕子 著  
J1編集部 編

神々の憂いと悲しみ  
インターネット公開版

---

発行日	平成15年 3月15日
編著者	千 乃 裕 子
電子書籍作成	平成17年 5月 5日
最終更新日	平成18年 1月 3日
作成者	エルアール出版 (旧ジェイアイ出版)

神々の憂いと悲しみ

—天と地のはざまにて星を仰ぐ—

千乃裕子

# 最後の審判

神の声を聞き、神を見しものが、盲いて、光に歩まず、  
ついに離れゆく時、天は涙す。

生まれしときより慈しみ育てし人が、その手を離るる時、  
天使は悲しみに憂う。

神は人々と共に喜び、憂い、苦しみ、歎き給うた。

その果しなき年月を一顧だにせず、

人は神を見棄てんか。神の子である人は。

苦しみの時、苦しみの時求めた神は

いつも救いの手を伸べて側に居給うた。

その愛深き神を棄てて、人は何処へ行かんとするか。

人々よ、悪に魂を委ねんと志し居るか。

神の声を聞けと、天の使いは呼びかけ給う。

自ずから伸べられし手をつかみ、救われよと――

千乃裕子

# 使命

千乃裕子

病める身で

書を著さんとて時に追われ、頁に追われ、

疲労の甚しくなりて 呼吸苦しく、

息も絶えんと思ふ時、

胸中を去来するは

只、空の青さと天使の群。

そは過ぎさりし 若き日の

健たかかなる日々の

美しく透き通る水を泳ぎ

浅瀬に遊びし時、

小さき魚の銀鱗を輝かせ

水を通す日光に 消えつ現れつ

身を翻ひるがえし泳ぐを見し

思い出。

心に五月の風が吹き抜け、

俄はなかに明るき思いなり。

水面に映りし日光のゆらめきなり。

天使の身邊に在りしこの頃  
来し方の寂しさは過去のものとなり、  
天使との語らいに 疲れを忘る。

病いを忘る。

天は癒しの力を与え、  
天使の優しき手にて疲れを去らせ、  
出来得る限りこの身は助けられおりしが、  
思いしことの三分の一も消化せず、

只情け無き時もあり。

されど天使の身邊に在るは

我身の喜びなり。

死はもう恐れを齎さぬものとなり、  
大空と天と地とに思いを巡らす時、  
死の定めは Bliss となり、

只一つの 病いと疲れとの  
最大の癒しなり。

その時魂は鳥籠を抜け出し 翼を持ち  
何処までも自由に羽搏はばたくなり。

天使の群と遊ばんと羽搏くなり。

我が魂は白き鳥となりて。

## 天の真理

千乃裕子

真理はキラキラと

光の粒子 夜空に溢れる！

完成の域にあるものには 言葉を失なう

美しさがある

人間の表現である

躍動するスポーツに 特に踊りと組み合わせられたものに

特に音楽に 特に詩に その息づく精神のかぎりに

美しさの極致があり その真技の頂点に

感動と涙がある

天の真理はまばゆく四方に

光の條すじ 永遠に広がる！

完璧なものには 言葉を失なう

喜びがある

人間の表現である

愛のやさしさと 勇気的美しさと 徳の厳しさと

そのひたむきな精神の力のほとばしりに

心打たれる真理があり

その人格の昇化と 浄められた頂点に

心揺さぶる感動がある 涙がある

感動と涙が 名もなき一人の人から与えられる時

その周囲には完璧な真理の世界がある

そして又

その真理は生きて 躍動するものでなければならぬ

言葉の美しさと 表現の美しさのみしか持たぬ教えは

既に死せる白鳥にしかすぎず

それは墓碑名しか残さぬ

感動と涙を その心と精神をもて人に与え得ぬ者は

真理の世界には生きぬ 美しき人格も持たぬ  
それは己れの生と死とを守る 慕守りにしかすぎぬ

## エルバールラム発刊によせて

千乃裕子

闘たたかいの中うちなる日々は

絶望に見える未来を時に齎もたらし

夢なき現実の世に生きる我々と

喜びも悲しみも怒りも

共に分かち合う天の人々

しかも尚、天なる国は美しき

幻の如く光に満あまてる天つ国は

美しくぞありてこそ

人の苦しみを

喜びとする価値を持たん

人の苦しみを

喜びとする価値を持たん

## はじめに

世界史のなかで、神と呼ばれてきた靈的存在が今世紀日本に出現し、その声を伝える使命を与えられたのが、この本の著者である。新興宗教にありがちな話と思いきや、そのスローガンは、宗教、共産主義をはじめとする、イデオロギーの否定と、超常現象の科学的還元といった明快なものである。この主張は最初関連図書『天国の扉』の中で、「宗教と科学の一致」として登場した。その背景には驚愕の地球史がある。——太古より地球に飛来した宇宙人が、肉体が亡びた後、靈となり天上界と呼ばれる靈の世界を形成した。その靈達が神々となって地球人類を導いてきた。それは、宗教、政治、文化、あらゆる方面にかかわっている——。実にそれが、一九七七年初版であり、これは、現在の日本におけるニューエイジブームや、チャネラーの登場に先駆けて世に出たのである。

その後著者は、靈に関するいわゆるオカルティズムに傾斜することなく、着実にその足場を固めた。二十年にもなろうかというこの活動の主要部分を占め、一貫してつらぬかれているのが、反共産主義の姿勢であり、それが、人類がよりよい方向に進むために、必要不可欠のスタンスであることを訴え続けてきた。その啓蒙運動の足跡が、本書に展開している（靈に関する教義をもつ多くの団体のそれが、瞑想や、現世利益といった個人の欲求を満たすものであることを考えれば、その視点の位置がどのあたりにあるのかが、お分かりいただけるだろう）。現在極東では、北朝鮮により、射程一千キロの弾道ミサイルが日本に向けられている。また、ソ連が崩壊したとはいえ、ロシアでは、再び共産党が台頭してきている。中国共産党は、依然として軍備を増強している。この状況下で、有事の際、日本が巻き込まれることは一〇〇%間違いない。日本人にとって、反共産主義とは、民族の存続をかけた、避けては通れない戦いなのである。

本書の後半で、衝撃的ともいえる事件——著者に対する左翼勢力からの妨害工作のことが、触れられている。しかもその妨害には、未知の電磁兵器が使用されている（関連図書 『天上界メッセージ集Ⅲ』参照）。これは、著者が、使命の為に神々より霊能を与えられ、特殊な体質と変化したことと密接な関係がある。著者は、天上界のエネルギーで常に満たされており、普通の人以上に生体エネルギーの横溢と放電がある。その状態に左翼勢力からの電磁兵器のビームが、本人に常に集中して照射される為（生体細胞の老化と破壊、生活の阻害、妨害を目的としたもの）、ビームが総て体外に放電する。その為必要以上に妨害ビームの持続と増強、増幅がある。それが著者に加えられる拷問となり、筆舌に尽くしがたい苦しみとなっているのである。

この本を手手にされたあなたは、その事実をにわかには、信じ難いと思われるかもしれない。なぜそんな被害に、しかもその著者だけが……と思われるだろうが、まさにその理由を、この本から読み取っていただきたい（ただ、携帯電話など、一般の電気製品からの電磁波が社会問題になりつつある現在の状況を考えれば、ひとごととしてかたづけられない問題をはらんでいる）。

また本書では、巷よまちの宗教団体のもつキャッチフレーズ「ここに入れば救われる——それ以外は救われない」をみごとに打ち砕いている。それは厳しくつきはなされた感じとして受け止められるかもしれない。しかし、今や二十一世紀まで残すところ数年となり、正邪が交錯するなかで、本書は、あなたにとって一筋の光となり、今後の道しるべとなるだろう。

半生をこの啓蒙活動に費やした著者の揺るぎなき信念あふれる本書が、ひとりでも多くのかたの目にふれ、その警鐘が、平穏で邪悪なる現代社会に届くことを、願ってやまない。

科学時代の啓蒙書『J』発行人

麻生忠孝

# 目次

はじめに	麻生忠孝	6
第一章 正法の歩み	千乃裕子	11
正法の歩み		12
アガペーの愛について		20
現正法を宗教団体視されることへの反論		32
第二章 政治編（一九七九年～一九九一年）	千乃裕子	37
血塗られた赤旗／自由主義と社会主義の尽きざる戦い／ソ連のみ利する反核大キャン ペーン／ロシア国民の悲しみ／凶器と洗脳の道具としての「報道の自由」／森永・グ リコ犯―道徳感を捨てた人間即ち左翼／「中東の狂犬」ガダフィのテロリスト国家／ 社会をアンチ・モラルへ導く共産党の々民主主義々／ソ連原発事故を利用する反自由 主義運動／創価学会と公明党の癒着ぶり／天安門事件―共産政権の非人道性／左翼知 能犯と宮本共産党独裁体制／クウェート侵略―共産主義の呪われたバーバリズム／他		
	（詳しくは「政治編」索引を参照して下さい。）	
第三章 神々の憂いと悲しみ（『J』「雑ノート」より）	貴巖幹子（千乃裕子）	150
一九九二年三月～一九九六年八月		150
補稿…電磁兵器最先端	諸星紀美子	294

第四章	天上界からメツセージ	エル・ランテイ／ラファエル	316
	一九九五年一月～一九九六年八月		
第五章	天と地の証		
	はじめに		420
	天と地の証	藤堂真澄	421
	キャラバンと奇蹟	池田和弘	423
	アリストテレスの『靈魂論』を読んで	北中太郎	425
第六章	証言集		430
	後継者は関西にあり／イエス様は何故苦痛なく昇天されたか		
	トリノの聖骸布への疑いと反証／十字架上の死及び復活を示す聖骸布々		
	聖書に現われる々消滅々と々合体々とは？		
第七章	日本共産党情報		450
	日本共産党情報／共産主義と理論と実体「結び」より／ロシア大統領選挙／		
	共産主義と強制収容所／志高き学長への期待（『産経新聞』「正論」より）		
	中村勝範／一新人類の反省		
	おわりに	貴殿幹子（千乃裕子）	510
	「政治編」年表・索引		514

第一章 正法の歩み

千乃裕子

## 正法の歩み

この地球に飛来し、約一万年前より私たちの地球に住む人類の大半と、ベール・エルデと名付けられた星から来た靈達が合体し、ともに、現れては消える文明と、歴史の大河を浮きつ沈みつしてきたという驚天動地の事実を、私たちは知らされました。

しかし、私たち地球の文明は、ようやくのことに宇宙飛行士という特殊な訓練を受けた地球人が月世界まで飛行する技術を開発する段階まで達したに過ぎず、また、たとえ宇宙の法則を天文学者や科学者たちが次々と明らかにしてゆくとはいえ現代科学により観測可能な範囲で約百五十億光年。無限の広がりの中に大宇宙は一千億以上の銀河系星雲や星団を含み、その各星雲や星団の中に平均して一千億個の太陽系の太陽に比較し得る、あるいは、それ以上の巨大な恒星をちりばめて、なおもその恒星がそれぞれの惑星、衛星を従え、その数はたとえれば、世界中の国の海岸線に沿った砂浜の砂の数ほどあるという、地球上の現代科学が推測し得るだけの空間をびっしりと埋めつくすほどの星を擁して、球形であろうが、鞍型であろうが、それら一千億個の銀河系星雲や星団は距離に比例して遠ざかり、宇宙が膨張しつつあるということ、宇宙について、私たち地球人が知る限りのものは、それくらいに限られています。

火星や金星に無人の探査機を飛ばし、人工衛星を地球の周りに回らせても、宇宙科学に関して、未開発の部分も多く、UFO普及化には至らず、ましてや、太陽系外の星へ人間が旅行するなどは、まだまだ五、六世紀先のことになるでしょう。

そのような地球に住む私たちにとって、宇宙は、まだまだ神秘の空間でしかなく、星のまたたきのように、多くの謎を投げかけてくるのです。それゆえにベール・エルデは、私たちの魂の先祖が住む星であると聞くと、誰

しも夜空を見上げ、その星に思いを馳せ、私たちの遠い先祖の横顔に夢を抱かざるを得ません。

知らぬ間に地球が太陽系外の他の惑星から飛来した宇宙人によって、その魂によって占められ、文明および科学の多くがそれに与るところ多しということは、驚愕すべきことでもあり、また、背筋を寒からしめるものでもあります。

私たち地球人はいままで、何に精力を費して来たのでしょうか。築いては崩れる文明という砂上の楼閣を単なる天災として受け入れてきたのでしょうか。ペー・エルデ星の人々が善なる心を持って地球を訪れ、ひたすら調和と平和とを願って正法という素晴らしい神理を齎らされたことは、驚きや不安を消し去るに余りある至福であるということを感じずにはいられません。ペー・エルデ星のみならず、仮名のM45、M36、M35の星の人々は、すでにユートピアを築き、互いに条約を結び合っておられるのです。この太陽系が、天上界の方々が、エル・ランティ様の下に調和を目指しつつ努力しておられる最後の星だと聞きます。

私はそれを伺うとき、私たち地球人はもつと文明人として精神的な成長に重点を置き、互いに明るく思いやりを持って、与える心と、譲り合う心と、愛と、正義と、心を清らかにすること、素直にすべてを受け入れる心——という極く当たり前の生活態度を人生に取り入れるという正法を軽視せず、そして、それを基盤とすれば、闘争は無くなること、破壊は無くなることに気づかねばならないと思います。破壊が無くなれば文明や科学はもつと前進するのではないだろうかと思うのです。

正法というものについて『天国の扉』（未来への幸せをめざして）で説明を致しましたが、これを新しい宗教と取る方もありましたので、これは実は初めに信仰形態として、次いでは思想、哲学として、そして再び宗教の形を取ったものであること、およびその長い歴史があることをお知らせしなければならぬと思います。

私自身も学んでみて驚いたことですが、この教えは、遠くおよそ三千年五百年前に遡り、古代ギリシャのデロス

島に生まれ、宗教活動に一生を捧げたアポロ（アポロン）という宗教家（ク己れを知れくと説いた有名なゼウスの子）により、その修業と悟りから生まれた教義なのです。

この教義は、ク生命は永遠不滅のものであるくと、ク人間は生老病死を経て魂の転生に入る。すなわち生きて、病いを経るか、老いて死ぬという人間の一生の自然の成り行きがあり、その死の境を越えると、そこに魂の永遠不滅が始まり、その永遠の時の中でいろいろな人に転生、生まれ変わり、死にまた生まれ変わるという過程を転生輪廻というくと、この二つで成り立っているのです。

この教えは正法とは呼ばれませんが、広く宇宙の視野に立ち、宇宙も人間個人もその構造が同じである、という原理が等しく適用され、この思想は、その後ギリシャの植民活動により小アジアのイオニア植民地に、二千六百年前に伝わりました。それを遡ると、古くは四千五百年前の古代エジプトの神話、信仰形態に、ギリシャの教義と同じもの（靈魂の不滅、永遠の生命）を伝えていたことが知られています（一万年前のアトランティス大陸にも、靈魂の不滅の思想が存在しました）。この教義は、エジプトからギリシャ、そして小アジアへ、小アジアからペルーへと伝わり、あるいはギリシャからインドへと伝わったのです。

そこで初めてダルマ（法）と呼ばれ、この法によって因果、因縁に基づく人々の生死の法則を、宇宙の法則に照らして、正しくブッタ様により、説き明かされました。（約二千五百年前）

生老病死の苦しみを乗り越え、永遠の生命を死後に得て後、転生輪廻をくり返すというエジプトの信仰がギリシャを経て伝えられ、カースト制度に支配されたインドにおいて、成就され得なかつた階級平等の思想がブッタ様の教団においてのみ実現され、この教義の大きな恩恵となったのです。

ブッタ様が八十歳で死なれて（入滅）後、その教えが途絶えるかと思われましたが、紀元前三八六年頃までかけて、十大弟子の一人、マーハー・カシャパーと女弟子の一人、マイトレヤ（紀元二七〇年頃インドに弥勒菩薩として転生）がその教えを努力して広め、およそ百五十年後に、史実に有名なアシヨカ王が在位の終わり頃

(紀元前三三〇年頃) ブッタ様の法に帰依し、法を用いた統治を行なつて、その教えを国全体に広めました。

王の法とは、慈悲と愛を以て平等の理念の下に民を治めるといふもので、初めて王が仏教を政治に導き入れて善政をしいたのです。そしてその保護の下にインド各地に広がり、アシヨカ王の死後、大乗仏教、小乗仏教という大きな二つの流れに分かれ、カニシカ王の代に至つて、西方に大きく発展しました。

大乗仏教は、紀元後に中央アジアを経て中国へ、中国から朝鮮、そして日本へと伝わり(紀元五三八年)、北伝仏教とも言われています。小乗仏教は二十くらいに分かれ、部派仏教と呼ばれましたが、セイロン、ビルマ、タイ、カンボジア、ラオスに伝わり、これらの派は南伝仏教と言われます。

またもう一つ大乗仏教からは三流派に分かれましたが、比較的大きな流れとして残つたのが密教で、これはその起源をブッタ様のお子様<sup>マハー・ラーフラ</sup>に遡ります。これが七世紀にインドに広まり、ラマ教としてチベット、モンゴルに伝わり(八世紀ごろ)、また他方、中国を経て日本にも伝わりました(紀元八〇五年)。

この密教における即身成仏の思想が人々の関心を誘い、安易な方法でも仏になれるという誤つた考えが、それから枝分かれした法華宗派の急進的なものにもでも人気と熱を呼び、次々と新興宗派を作つて行くのです。仏の境地というものは静けさの象徴と悟りによつて代表されると見てもよいと思うのですが、儀式さえ踏まえればよいと悟りや静けさとあまり関りのないようなものまでが蔓はびりました。

禅宗も仏教思想に基づいた教義で、実践主義に基づく悟りがその主なるものです。これはインドに古くから伝わる精神集中の実践で、ブッタ様も禅に入つて悟りを開かれました。

禅は原始仏教以来その重要な業の一つとされ、仏教以外でもインド全般に広く採用されて、ヨーガ学派から諸学派の真理体得のために用いられ、また中国では天台宗派に取り入れられ、止観として盛んに実践されて、天台華嚴の学問に裏付けられた後、禅宗として独立した一派が生まれています(八世紀の初め)。

このように、ブッタ様の手によつて仏教の体系と流れが形作られました。光の大使、光の大指導霊、光の

天使の転生はそれに留まらず、アラビアの予言者マホメットをしてイスラム教の創始者とならしめ、多神教を否定し、唯一神アッラーの前における平等を唱えさせました。ガブリエル大天使の啓示による神託が大部分で、誠に多くの神託を伝達したと伝えられています。

イスラエルにおいてはユダヤ教に始まるキリスト教への枝分かれ、すなわち、人類の祖アダムとイブからカインとアベルの物語へ、ノアの箱舟の物語、バベルの塔の物語、ユダヤの父アブラハムとその子イサク、イサクの子ヤコブの十二人の子供、それが十二支族の族長となり、エジプトにヤコブと十一番目の息子のヨセフとその一族が移住、他は東南アジア、アジアの国々（日本を含む）へ移動し、そしてキリスト教の歴史はこのヤコブ一族の子孫のエジプトにおける苦難の歴史から始まると言つてよいでしょう。

そして最後の移住後間もなく、飢饉を知らせてエジプトの危機を神の啓示で救い、エジプト全国の司となつたヨセフが死に、その時のパロも死んだので、新しいヨセフのことを知らない王（パロⅡファラオ）によつて子孫が多く増えすぎたヤコブとヨセフの一族、すなわちヘブル人は奴隷とされ、紀元前十三世紀ごろモーセ様がその中から生まれます。ヘブル人（イスラエル人）の男子は殺すようとのパロの命が下されていたので、出生を隠すため、母親の手によりナイル河に流されますが、それをパロの娘が拾い、王宮で育てられます。成長した後、神の召命を受けてこの捕囚の民ヘブル人と紅海を渡り、アラビア半島へと救い出されるのです。

そして約束の地カナンを目指して行く途中、シナイ山に至り、神ヤハウエ（エホバ）より十戒を啓示され、それをヘブル人に守らせ、これが後のユダヤ教の律法となり、旧約の經典の骨子となりました。

モーセ様とヘブル人達は四十年を費してヨルダンの東まで行き着きますが、そこで不幸にもモーセ様は、老齡と重い任務の疲労から目的地を前に亡くなられました。

その後もいろいろな歴史の変転があり、いわゆる旧約の時代に多くの予言者が出て、人類の救世主イエス・キリストの誕生を予言するのです。

そしてアブラハムの四十三代目の子孫ヨセフから、予言にしたがって、救世主を信じるユダヤ人が待ち望んだイエス様が生まれられます。

ユダヤ人（ヘブル人——イスラエル人）の大半はイエス・キリストを認めず、モーセ様を始祖としてユダヤ教を伝承しましたが、神の啓示、予言、奇蹟を信じたイスラエルに住む人々は、イエス様と共に神の福音を信じ、それが今のキリスト教として長い苦難と栄光の歴史として残されているのです。

（キリスト教に関する物語、史実は旧約、新約聖書に記載されております）

日本に移住したアブラハムの子孫十二支族のうちの二つの流れは日本で神道として、天照大神を祖とし、継承されて来ました。

これら歴史の流れを伝えて来ますと、宗教、宗派と言われるものは数え切れぬほどありますが、枝分かれしたものの、発生源が別のところからであるもののそれらを辿れば一つに帰るのです。

すべて天上来、天国、人々に死後の希望を与えられている神の国、ブツタ様他、諸仏のいられる極楽浄土、そこから啓示があり、予言があり、神託があり、善霊の導きにより、一つの法、すなわち宇宙を支配する法則であり、大自然の法である万物の生命が一つの法則の下に輪廻していること（生から死へ、死から生へ、無から有へ、有から無へと廻り廻っていること）それを人類は長い歴史を通じて証されて来たのです。

これを正法というのです。

すべての思想史、哲学史も正法を伝えるものに他なりません。

同じことを説いているのです。

そしてこのように善霊の転生が文明の推進力となり、また科学物質文明も、個々の分野において著名な人々は高次元の霊の合体、守護・指導を得て、発明、発見、研究が進められて来ました。（詳しくは『天国の証』の第八

章の表をご参照下さい。)

言いかえますと、いかなる分野においても真理を発見する際に、真理は、学者、特に科学者、物理学者は種々の思考過程、実験過程において、試行錯誤をくり返した後たりつくものであることは、熟知しておられると思います。

そしてその真理が、常に何か根源となる大きな計り知れぬような未知のもの、謎ではありながらそれしかないもの、を指していることに気付かれるでしょう。

何から調査研究を押し進めていってもいつも辿り着く同じもの、同じところ、それは多く直感によつて結論が出るものなのでしょうが、それが正法の真髓、すなわち神の法、絶対的存在であり、唯一無二のものなのです。

そして神の法とは、万物を一つに統一して秩序立てている宇宙の法則、宇宙の構成、宇宙の仕組み——どのようにして宇宙は生成し、発達し、その構成員である約一千億の一千億倍の星々が(恒星、惑星、衛星など)互いに関連し合つて年輪を経ていって、その中に恵まれた惑星が微生物を誕生させ、それを恒星の光と熱エネルギーによつて育成し、植物、動物、人類へと進化させる——その大宇宙、大自然の法則——これが唯一絶対無二の變化しつつ、恒常的であつて、つまり形は変わるが、絶対的存在は変わらない不変のもの——を指すのです。

この法によりありとあらゆる現象、物質および存在は、その意義と役割りを説明し得るのです。他にはありません。

その法を現代科学や物理学、天文学その他あらゆる学問研究の分野で、一つ一つ解明していつているのです。

それを正法という宗教思想とは別の研究分野では、宇宙の真理と神の法、神の理は繋がらない、何か別の分野である——と学者は理解されているようですが(宗教家は宗教家で、科学は物質の解明、すなわち物質文明を促進するもの、そして宗教は魂と心の解明に終始するものと主張します)、そうではなく、これは人間が感情と理性を持つ一つの人格であるように、宇宙という大きな宇宙格?に感情が宗教としていままでの歴史を持ち、理性

が科学史によつて代表されている。

つまるところは一つの大きな存在の解釈が二様に分かれていたに過ぎないのであることを天上界の方々は強調し、くり返し『天国の扉』で説いておられるのです。

すべて宗教も一つ、科学も一つ、そして宗教と科学が一つになり得るのであること。デカルトの、精神は身体の一様態に過ぎぬとの考えに基づく、「我思う故に我あり」という、微妙な奥深い言に、その答えがあるのではないでしょうか。自分という物質体、生体が、 $\times$ 思う $\times$ という心の動きでしかないように思える行為において、その存在が初めて意識される。その逆もまた真なりで、 $\times$ 我 $\times$ という生体が存在しなければ $\times$ 思う $\times$ という心の動きも存在しないのです。

そう解釈致しますと、 $\times$ 物質と心が同じもの？ $\times$ 科学と宗教が一致し得る？ $\times$ という普通は考えられないような事柄が、魂の要素の科学的説明、ならびに精神の動きの生理学的説明、が現代科学の範疇で明快に天上界の方々によりなされた時、私は実に驚異の念を以てそして素直に納得し得ました。

感嘆の吐息が出たのです。これこそ、今まで解ろうとして解り得なかつた、神秘のベールの向こう側にある謎のすべてを解き明かしてくれるクノッソス王宮（ギリシャ神話参照）の $\times$ 糸の端 $\times$ であると。

人間の心理として、あまりに単純化し、単一化することを嫌う傾向があります。謎を好み、神秘を好む。もちろん宇宙の法則、構成、個々の生体の法則、構成には、未知の領域が多く残されています。

それを探究し、発見することは、人類に与えられた課題であることは否めません。

しかし纏めれば同じことを説き、一面のみあるいは完全に近い形で説き明かす教義、思想、哲学、科学上の真理発見を、人類はそれぞれ独自の形態として主張し、他を排斥して来しました。

この末法の世において、天上界からそれが一つの方向を指していることが強く語りかけられ、証され、人類は団結して同じ方向へ進まねばならないこと、破壊を憎み建設へ、平和へ、個人個人が協力せねばならぬことを、

高橋信次様を通し、その説かれた法を信じ、教えを広める人々、そして私が編纂致しました天上の書を読み、使命に目覚め、少しは異なる点もありますが、同じ法を説こうと努めておられる方々により、日本全国へ、世界へとその伝播が実現しようとしています。

〔天国の扉〕・〔天国の証〕より抜粋

## アガペーの愛について

（八〇年二月）

最近の新聞広告欄に現われた雑誌の内容紹介に、一九八〇年代は々悪の時代々であるとか、イランに言及して々悪の論理々、あるいは新聞の社説、国内外の有識者の論評に々危機の時代々、々危機の連続々、々不確実性の時代々といった表現が現われ、いよいよ悪霊が総決起し、世界的規模で次元を超えて動き出したらしいと感じました。しかしそうやって悪が勢いを盛り返そうとしている八〇年代ならば、なおさらそれに対抗して、善も強く力を得て立ち上らねばならないとくり返し提唱致します。

勸善懲悪は一つの観念論で、自然の大きな流れの中では小さな湧き水の価値しかないという考え方では、々悪の論理々が通り、性善説などを唱えて呑気に構えていられなくなるのは飼犬に手を噛まれたような現状の米国を見ても明らかでしょう。

私は信念として、人や悪霊やサタンの悪念に負けるような弱い善我であり正義であるならば、々私は善人だ々と思うただそれだけの価値もないと考えております。たとえ高僧といわれようと菩薩といわれようと、聖人とい

われようと、悪を放置し許容するのは偽善者であり、悪人に等しいと確信しております。

神々の意志と力は古代より人類と地獄の上に君臨し、彼等を従えてきたと言い伝えられているのは、それだけの強い善の意識と正義が天の国に迷わぬ無限のエネルギーを与えてきたからでしょう。

その善と正義は何の為のものか。それは常に人類の為に良かれと思い、導く神々の愛の心から出るものであり、人類を救おうという熱意と温情以外にはないのです。尽きることのない人間への暖かい関心です。"To err is human"と英国の詩人の言葉にある通り、過ちを犯すのが常であるのが人間であっても、天は人の過ちを許し正してこられました。人類に幸せを齎す為に正義と信義（神と人との間に）と愛とを説いてこられたのです。

今まさに現天上界は、過ちを犯し、救い難く迷いの道に踏み込んでしまった人類に、全く同じ事ではなく、更に大なる真理を以て（でなければ救えない為に）、悪と善との位置する所、それが何処に端を発し相剋を続けているか、それを明らかにすることによって人類の理性と真理への渴仰を呼び覚まそうとしておられます。人類自ずから救うものとならなければ、神の手によってのみではもはやそれが不可能な事となったことも一因なのです。

そして神の示された人類の過ちの中に、世界にガン細胞のように蔓った宗教宗派という人類の寄生虫、サタン、悪霊の中間宿主が明らかとなりました。それは『天国の扉』によって、神々や天が、人が夢み、宗教が築いた儀式と偶像と幻想の中にはないことを明言されたことに始まったのです。

しかしながら非常に残念なことに、真に人の心を繋ぎ留める価値のない宗派、教団が内部崩壊するのは当然としても、世界の宗教界の現状は、教義の誤りや教団自体の在り方の矛盾、欠陥に気附かず、頑なに従来のままを良しとして盛り立てている信者や信徒のお蔭で、天より告発され解散を命じられたにも関わらず却って一層団結を深め、偽善や偽我のあるがままに、もはや真理の脱けがらとなった既成宗教が新興宗派と手を結び、派手に勢力範囲を拡大していきつつあります。

それは単に彼等の自己保存の現われであり、心血を注ぎ生涯の信念として生きてきた人生への執着であり、且

つまた天を裏切り真理に背を向けることになりはすまいかという恐れと、過去の遺産を壊せといわれても壊すだけの勇氣がない人間の弱さでもあるのです。

歴史の中で真理はいつも思いもかけぬ形で人の前に提示され、人々は誤った過去の教説、学説と新らしい説との間に立たされて二者択一を迫られ、またそう余儀なくされてきました。天動説を地動説に切り換え、天地創造説から進化論に切り換え、モーセの律法からキリストの愛の教えに切り換えることをいつも神に迫られてきました。

そして博識を自ずから任じつつも、実は判断力に欠ける大勢の暗愚が古い教えに拘り、文明の進歩を阻んで来ました。

「神々」という名を人類の墮落と低迷の手段として驕慢な僧侶や教祖や牧師達が天と人との間に立ちはだかつてきたのです。

今や神々は、神は人であり、霊は人に属するものと認めることを人類に要求されています。古い慣習とマンネリに安住するのが多くの人の本性であり、世界情勢が激しく変化すればするほど不安な心は一定不変のものに執着しようとする。

それを神は「立ちて歩み出せ」と言われた。いつの間にか迷路に入り込み神から遠く離れてしまった、盲でいざりの宗教人であり信者達に。

宗派の指導者側でそれが出来ないのは、彼等がいざりのままで盲目として安住した生活の歴史が長すぎて、自ずから努力して真実を見よう、歩き出してみようとする勇氣がないからでしょう。いままでの教えのすべてが真実であつて動かし難く、且つ実証可能な真理であると盲信しているか、あるいは確信はなくても、多くの人が血を流して遵守してきたものだから、これが唯一のもので他はあり得ないと強迫的に思い込んでいるのでしよう。

一方信者の側では、天に財宝を積んだのだから、万一地に積んだのであつたとしても、その報酬はその宗派、

教団から何らかの形で来るはずだと内心考えており、考えていないとすれば慈悲魔という愚かであつて、教祖や僧侶や牧師は彼等が養わなければ、生活の道を知らないほど尊い雲上人だと思ひ違ひをしているのでしょうか。

一体何の為にそうなのかは解りませんが、ブルジョア階級であり特権階級である僧職者ならびに教祖は、人の子は枕する所なしと言われたイエス様の時代には比ぶべくもなく、ブツタ様やイエス様の教えに各自様々な解釈を加え、後代の学者の論述を併せて、形而上学の堂々たる体系として展開、教示し、著述することで莫大な献金や会費が手に入るとあつては、教会や教団も彼等を離さず、彼等自身もそれに甘んじて座食するのは当然の成り行きでしょう。

そして天に仕えず地に仕え始めた僧職は、踏絵どころか教会を代表するものとして、奇跡は教訓を効果的にする為に、学者が勝手に作り上げた作話々であるとか、イエス・キリストは実在したが、ユダヤ人モーセは実在の有無は不明である々々と平然と書き、世に阿ることとなり、仏教は曲折、派生して、南無妙法蓮華経々や曼陀羅、太鼓や錫杖で象徴され、神道は巫女としめなわと神と簡略な祝詞のりごに変化することになります。新興宗派は何と表現すべきものでしょうか。

実に莫大な財産を手にしてそれを壮麗な建築物に変えてしまった教会や教団や寺が、それらをすべて売却、処分して難民や飢えた国々の救済に投ずるならば、国民に政府がインフレ経済と耐乏生活を要求し、対外援助として税金からあえて捻出する必要もなく、宗教教団が常に率先して、世界の苦境を助けるべく駈けつけるならば、その国の名譽となりこそすれ、国ぐるみ糾弾されることは決してないのです。

しかるに日本の宗教教団は何をしたか。

彼等は平和会議との名目で、宗教界の世界会議をリードした。世界に平和を提唱するべく合議した。共に礼拝をした。より結束し団結して外部からの干渉を寄せつけない為に陣容をたて直した。ただそれだけのことなのです。日本の宗教界はインドシナ難民やバングラデシユの子供達の為にどれだけの事をしたのでしょうか。ユニセ

フはまたもや国民に基金を呼びかけています。最初の宗派ぐるみの救援活動に立ち上った京都・西本願寺も、一億円が目標の募金を信者や上山者に呼びかけています。何故出資者はいつも国民でなければならぬのか。

世界の宗教界は個々の活動を除いて少しばかりの赤十字の仕事と祈ることとローマ法王の諸外国訪問の他に何をしたのでしょうか。彼等は先頭に立って足らぬ所に財産を投じて援助するだけの力を持っておりながら、教会や寺院建立の為に主力を集中しなければならず、これほど不可解で不合理な浪費はないと思えるのに、信徒から得るだけのものを救済や慈善事業に廻せないのです。彼等の偶像を安置した豪華絢爛たる建物を建て、教育施設、都市計画に参与し、勢力を拡張し、経済界に名を成し、政党作りから政治をも牛耳ろうとする。初めはイスラエルのディアスポラ（離散の民）の如く、終りはイスラム圏の如くに単一宗派の布教区域を確保する大目的があり、人を救う為にのみ全力を投じ得ないのです。

文明や文化の遺産として美しい建物を残すのもよいでしょう。しかし今この末法の世に、改めて遺跡として残るものを宗派の遺産として建てる必要はあるのでしょうか。神から離れて真の文明から遊離して、彼等自体が前近代的、さもなくば曲論的知識と教義をたずさえ、人を救う々々という大義名分は一体どのようにして実現させるのか。現実社会に適用して理想的と見えるイスラム的社会も、曾ては精神の代表であったキリスト教も、キプツのユダヤ人と同じく彼等の閉鎖社会、クローズド・システムの中では平和であるかも知れないが、公害を阻止するには役立つこのシステムも、人間社会においては世界の自由な広がりや宇宙や自然の謎を探索しようとする、これも人間の本性の一面である科学的探求心を満足させることは出来ず、個性の自由な発露である哲学的思索にも枷かぎをはめてしまうことで、人間の向上心と精神的成長を麻痺させてしまう。つまり宗教界に属することは形式的に留め、軽視するか、宗教界は旗色を不鮮明にでもしなければ人間が文明の進歩を諦めねばならない性質のものとなってしまったのです。人間の知的レベルが宗教論や教義のレベルを超えてしまった時、人類は宗教に興味を失い、それに代るものを求めるのは極く自然な動きでしょう。今反動的に悪霊の扇動を得て、反近代化

や原始宗教形態への復帰現象が見られますが、形骸化した宗教そのものは宇宙文明の夜明けと共に遠からず衰微の一路を辿るものとなるでしょう。

心と魂について関心を持つことが宗教全盛期への逆行であると短絡的に結論を下してはならないのです。人間の魂（意識）も進化するものでなくてはならないのです。

神不在の宗教組織が用いる「神々」という言葉に怯えて、イスラム教徒の振りかざすコーランに畏縮する現代人であってはならない。詭弁論に過ぎない、少数の特権階級下の（革命指導者及びその側近による）「反近代的、暴力的財産共有制度、即ち共産主義思想の不合理性を見抜けないような現代人であってはならないのです。」

宗教をも含めて、一つのイデオロギーにのみ遵法じゆんぽうすることは、現代の科学性と矛盾するものであり、人間個々の意識の向上にも、社会の改善にも健全化にも益とならないことを再認識するべく、私達は今々危機の時代々に直面しているのです。再び人類は過ちを犯したことを認めねばなりません。

もう一つ、恐らくこれは日本におけるのみの傾向だと思われませんが、墓を死者への崇敬の念を表わす鎮魂の儀式の一つとして、葬儀と共に壮大に華美にする歎かわしい非近代的風潮が目立ってきました。墓相が肝心と、何度も墓を建て直させ、先祖崇拜、解脱会、霊友会と名称をつけて、仏像を無数に作らせ、仏壇や祭壇に並べ、霊の安らぎに供してこの世の繁栄を約束する教祖、宗派の為に実際に生活に必要としないものにあらゆる投資をさせるものから、仏壇を絢爛たるものにするのが死者の霊の慰みになると教え、仏具商を裕福にする新興、既存教団があります。

そのような迷信の虜となった信者達が仮にもこの世の幸せと繁栄を満喫しているとすれば、それはサタン・ダビデとその配下の残した悪の遺産であり、悪霊間の気紛れな気前の良さが豊かさを与えてくれているに過ぎません。神は人を過度の不合理な浪費に追いやるような方ではないのです。

死者の為の莫大な出費を喜ぶ人々の気持は、自分の為だけ、家族の為だけ、先祖代々一族の為だけの投資であ

り、狭量なエゴイズムと虚栄心の延長です。こういった人々は現世の利益を求めて自分のみの幸福を求めるあまりに、易者や占師、諸相学、占星術師、靈感占い、御利益信仰などを遍歴し迷信を蔓らせる一助となっているのです。そして勿論、慈善活動や福祉運動に積極的に参加する財力に欠け、ユートピアや神の国、隣人愛、自然界との共存共栄、世界の平和などは共感するものがないに違いありません。

視点を變えて、歴史的に墓や寺院や、宗教、僧侶への布施を義務づけた国々の文明度はどうかでしょうか。カースト制度は、いうまでもなく、僧侶の修業が若者の社会生活への出発点であったり、寺院や教会や墓地をその国の経済と不均衡に立派に保存している国々は、貧富の差が激しく、あるいは文明衰退、文化の足踏み状態が著しいのです。——赤化の有無を問わず、インドシナ半島、時代錯誤のイラン、フィリピン、インドネシア、スペイン、インド、イタリア、エジプトなど。遺跡保存、他国の文化吸収と文化の二字には鋭敏な日本も、精神の成熟度は戦後と大差はなく、文化国家と表現すべきかどうか、今以て戸惑いを覚えます。

経済的に不均衡となるのは、資本主義が一手にその罪状を課せられますが、文化の膠着、文明の衰退には、宗教至上主義も、経済平等至上主義（即ち共產主義、社会主義）も告訴されねばならないようです。過去の歴史と世界の現状がそれを語っています。

同様に日本の国民がイランに準じて宗教へのノスタルジアを持ちすぎると、経済的にインドの二の舞になり、カースト制を採り入れた国家と同じ惨状を呈するでしょう。それは良識として警告されなければなりません。

私が天の意に従ってこういった明らかな社会の不条理を指摘するのは、たとえ宗教（神頼みという他力信仰）とイデオロギー（誤った実存主義——自我の目覚め、自己の能力再確認）が人間の本性に根ざした生存の爲の手段であるとしても（人間の本性に根ざしているから根絶し難いものであるとしても）この明白な人間のエゴイズムが人類及び地球の滅亡に至る一大要因となっているからなのです。

宗教も革命的、政治的イデオロギーも理論や教義の上において利他的な外観を備えています。しかし現実はその

の指導層のエゴの表現でしかないし、組織化された瞬間に、あるいはその結果、合目的性を失う欠陥をもつものであることが、充分すぎるほど実証され、論証されたのではないでしようか。

これを利他的エゴイズムと名附けるべきでしようか。この言葉の含む人間の心理の文とその表現である社会機構——それが利己的エゴイズムとの様々の摩擦を生んで現代の（のみならず、人類史の存続する限り）悲劇と世界的危機を迎えたものとも言えるでしよう。

さて、ここにおいて、再び触れなければならないのは、宇宙、自然の法則が果して利他的であるか、利己的であるかという点です。歎かましいことに、宇宙、自然（動植物すべてについて）共に個々の存在、生存様式は利己的エゴイズムそのものであり、環境適応、自然淘汰が進化、絶滅のリズムを統御しているという事実しか見出せないようです。

只、天上界がくり返し指摘し、説かれるように、宇宙や自然はあるがままでは、その法則に従って運行し、あるいは生存を続けるのであって、星の誕生も活動期も死滅も、自然界の例えば天敵による種のパランスも、漸次の変化、環境による必然的な変則はあっても、決して予期できぬほどの過度の変容はないことが諸学者の説により帰結し得ます。そのリズムを壊し、パランスを失わせているのが一人人類のみであると論じられているのです。その法則が人類の生存様式にも当てはまると仮定してみましよう。とすると従来の歴史的、世界的悲劇の数々は、利己的エゴイズムの闘争が生み出したものであって、人類という種の中の社会的な自然淘汰現象であると言えるわけです。

宇宙は無論のこと、自然界は自己の生存のみが重要であって、他者の生存にまでは関心を持たない。ただ唯一の利他的配慮が見られるのは、闘争が死闘ではなく（例外はあるが少数で）、飢えを満たすためにのみ殺害や破壊（植物の）が許されていることでしょう。

ところが人間社会では、殺害ならびに破壊は必要上為されるのではなく、欲望充足の手段として行われる。こ

の点において自然界に比べてより利己的なエゴイズムが観察され、そこに修正、是正が行なわれねばならない。自然界、宇宙の存在に見られる、非情ではあるがより適応性の大きな環境——少なくとも最低の環境調整として、人間の社会機構、人種・民族（狭義には国家）の共存共栄が確保される為に、人間間の規約である個人の倫理、国の法律、国際法が確立されているのであり、それを無視する利己的な個人、人種、民族ならびに国家が世界の秩序を破壊し、引いては人類を避けがたい滅亡に追いやることになるのは言を待たないのです。

宗教やイデオロギーが何をどう繕おうと人類全体の生存、存続即ち平和共存のみを目的としなければ、彼等の主義主張は合目的性を失うのは必然でしょう。

自己抑制の可能な知的レベルの高い人々は本能的にそれを知っており、賢明な国々は和議・和合によつて共存を図ろうとし、法を犯す者、対国間条約、国際法を無視する国家は制裁されるという現象が起ります。その制裁を無視し理性的良識的解決を待たずに自己の利益、主張、自国の野望を貫こうとするものは無知であり、愚かであつて、完全な社会悪と断じなければならぬ。彼等の論理を、悪の論理々として斥けるのは当然であり、且つ正当な措置なのです。

人類全体の滅亡は自ずからの破壊をも許し、生存を許さない。従つて闘争革命的思想は平和協調的思想に譲るべきものであり、また譲らざるを得なくなるのです。それが人類社会の環境適応条件であり、最低の環境調整であるとも言えましょう。

知性高く賢明なる神々はそれを有史以前から熟知しておられ、人類を善導してこられたのです。現天上界はかくも正しき論理と人類の選ぶべき道、為すべき諸事を説いておられます。且つその善意に対して、正義に対して、人類愛に対してこの世紀に住む、末法に生きる私達は反論する何らかの論拠を持ち得るでしょうか。

あえて現天上界に反く愚かな人々がいるとすれば、個人であれ、神と繋るとうそぶく偽善の宗教宗派であれ、それは許されざる社会悪であり、裁かれねばならぬ存在なのです。

この事実を世界の良識は見抜かねばなりません。その止めどなき利己的エゴイズムを、偽善とすりかえの理論で私達を欺く偽善者を、厳しく批判し、改めさせなければならぬのです。平和共存、共栄の原則を無視するものは適応能力を欠くものであって、人間社会の自然淘汰により絶滅されるべきものです。

平和の重味を知り、人間社会のみならず、自然界との共存共栄を唱える善人、義人及び良識を有する人々は、もし社会悪にこのまま譲り続けるならば、自ずからが不適応を立証し自然界と共に滅びゆくものとなるのです。それを果して望むものでしょうか。

善は強くなければならない。悪に譲るべきではない。反つて悪を々平和な々社会から、追放するものでなくてはならない。

そしてここに平和共存に不可欠の真の利他的愛、博愛、隣人愛、アガペーの愛が再び論じられねばならないのです。

アガペーとは利他的感情の真髓であつて、イエス・キリストの自ずからを燔祭はくさいのいけにえとなす十字架上の死に象徴される、々自己犠牲の愛々即ち々愛を与えること々に集約されます。

哲学者も語り続けるように、人間は々愛を与える々というアガペーの思いや意志、行動を止めた瞬間にその関心は自己愛に向かい、他に求め奪う愛、エロスの愛、即ち自己の存在を確かめる為だけに表現される本能的な愛に墮してしまふのです。

特にフィリアという友愛、隣人愛は最もこのエロスとアガペーの間を絶えず揺れ動くものとなり易いものです。昨年しねんの暮近く、正法者の一人が、シエル・シルヴァスタインという詩人であり、漫画家であり、歌手であり、演奏家であり、作曲家であり、児童文学作家という多才な米国人の手による『おおきな木』という和訳の絵本を一冊、私に送って下さいました。

それは世界各国で本人が予想もしない反響を呼んだ話題作で、一本の大きなリンゴの木が、一人の男の子の成

長と共に自ずからを、与えて変化していく、母性愛の象徴の如き物語です。

その木をいつも訪れ続けた男の子は少年になり、青年になり、成人し、恋をし、家族を持ち、中年になり、裕福になって世界を旅し、そして人生の終りに総べてを失い、疲れ果てた老人として帰ってきた時、身を供して総べてを求めるままに喜びと共にその男に与えたリンゴの木には、もはや切り株しか残されておらず、老人は最後の要求としてその切り株に昔を夢みて坐り、休みたいと述べ、リンゴの切り株は老人と共に居て幸せであつたという筋でした。

見方によれば、只奪い、利用し続けた苛酷な人間のエゴイズムと、それを許し、されるがままに、しかも利用されることを喜びとしている自然界の象徴であるとも取れる物語なのです。

作者が驚いた世界の反響は、淡々と人間と植物とのドライな物語を描いたのに反して、読者が今の世情不安に求め続ける一種の愛の形——母の愛の象徴と錯誤した、それにあるのかも知れません。世界中がそのような愛を理想視しているのでしよう。

なるほど、与える愛は其の与える行為において充足感があり、アガペーの愛であればあるほど、与える側の精神の昇華と受ける側の感動が惹き起されます。

ここでしかし混同してはならないのは、与える愛は良き師の如く育てる愛でなければならぬ点です。無限に与える母の愛はアガペーの本質ではないのです。

イエス様が一粒の麦落ちて死なずばと云われたのはそこにあります。

シルヴァスタインの描いたリンゴの木は男の子に精神的な遺産を与えたわけでは決してないのです。側に居てくれることを喜び、絶えず何かしてやれることはないかと問うていました。そこに世界が共鳴した母親像が現われているのかも知れません。しかしそう問い、与え続けたのは男の来訪を期待し、来訪によって自ずから与えるものを有していることを認識し、自己の存在を確かめて喜ぶエロスの愛なのです。与える喜びに溺れる愛であり、

男がいかに非情な要求を出そうとも意に介さない、マゾヒズムの表現なのです。そして男も奪うだけの行為、自己愛しか学ばなかった。

イエス様の十字架により象徴される愛の教えは、マゾヒズムの表現を持ちながら、マゾヒズムであつてはならないものです。何故ならば、イエス様の教えの目的とする所は平和であり、隣人愛を通して互いの幸福と繁栄を目指すものであつたからです。まさにその真理に基いて、同じく世界の平和共存の為に愛を与え合ねばならないのです。アガペーの愛であつて、エロスの愛ではないものを。互いを奪うものではなく、互いを正しく育てる愛です。

この行為の価値とその成果を人類は学ばねばなりません。人間社会において。自然界と人類との関係において。

もし人類が真に地球上での存続を望むのであれば、人間社会のみでなく、公害、自然破壊、生物の絶滅に関して取るべき責任と果すべき義務は、人類にのみ残されている課題なのです。イエス様は厳しく人々の過ちを正され、父性愛を与えた方でした。アガペーは母親の愛ではなく、父親の愛の表現であつたのです。師として人々を導き、病人には立ちて歩め々と自ずからの意志を強くする言葉と、魂に自由を与える言葉を掛けられました。

宗教やイデオロギーが自ずからの益の為に、あるいは自己の存在の再確認の為にのみ、母親の如く人々の魂を束縛するならば、目を開けて、意志強く歩み出ねばなりません。

神は父親の愛を以てそう命ぜられているのです。そして、あまりにも多くの非道な歴史を残したキリスト教は、人類を墮落させ、精神を高め得なかつた仏教と共に、且つ大虐殺を副産物とした共産主義思想その他のイデオロギーと共に神の前にその罪を償い、世界の前に実に大いなる徳を積まねば天の許しはしないのです。

## 現正法を宗教団体視されることへの反論

(七九年八月)

私達正法者の「集い」の一主宰から、「日本の新興宗教」特集の『歴史公論』昭和五十四年七月号（雄山閣出版）にたまたま私の名が出ていると知らせて下さり、同誌を送って下さいました。

なるほどすごい論文が、新宗教の現況というテーマで出されており、書き手はと見ると、東洋大学専任講師西山茂とありました。

曰く、GLAとその系譜をひく千乃裕子らのグループが新新宗教と分類すべきタイプに属し、同宗教には終末論的な根本主義をかかげるセクト的なものと、呪術色の濃い神秘主義を標榜するカルト（オカルト）的なものがあり、その後者であるとしていました。GLA、神靈教、世界真光文明教団など、「真光教団以外は、信者数がせいぜい数万どまりの小規模組織であり、教義や生活規範もほとんど体系化されていないが、すべてに共通する特性として霊現象と秘儀や奇跡の強調がある。」

更に山折哲雄なる人物のGLA教団における靈魂転生の秘儀に対する評論から、「経済の繁栄のなかに理性原則への倦怠感といったものが混ざり合つて、それが人々のオカルト的超常世界への関心をかきたてている」という箇所を引用し、バーガーの『故郷喪失者たち』なる著書から「世俗化傾向の逆転の可能性を示すばかりではなく、脱近代化衝動の具体的発現として理解することができる」という箇所を抜粋、「しかし他方で、こうした非合理的な神秘宗教も、しよせん徹底的に合理的な経済機構に依存してしか存在ができないとすれば、つまり、もつと進んだ産業社会でしか発展しえないとすれば、それはせいぜい社会のなかで一定の『保護区』を占めるぐらいの発展しかできないだろうと推測するむきもある」とし、「こうしたタイプの新新宗教が極度に合理化されて息もつまりそうな我々の社会に対してつきつけている問題の性格には、ひじょうに鋭いものがあるように思えるのだが」

と結んでいます。

終末論的タイプの方には創価学会と同じ日蓮正宗の系譜に属し、今なお活発な折伏活動を展開している妙信講や、ものみの塔、世界基督教統一神霊協会（原理研）などがある、と分類しています。

不思議に同系列にしか思えない白光真実会がこの誌上には見当たらないのですが、真光文明教団と同じような呪術色を持ち、秘儀、奇蹟をちゃんと備えてあるのに、生長の家系では大本教のみが同誌上で教授クラス他の識者の話題とされているのは、一体どうしたことでしょうか。移り変りが激しい今日、既に新宗教とは見做されないのか、あるいは生長の家系の識者に語らせているのか。まさかそういうことはないでしょうか。

それにしても何を読んで、西山氏は「千乃裕子らのグループ」なる私達正統派正法者を非合理的なオカルトと神秘主義に片付けているのか全く理解に苦しみ、新興宗教や新宗教と混同しているのは全く以て遺憾とする所です。某大学の一助教授はいやしくも講師たるもの、このような皮相的解釈で結論を出してもらっては無責任だと言われても仕方がないと評されました。

私達はあらゆる宗教宗派批判の立場に立つものであり、説く所のものには精密科学と比肩し得る立証性を持ち、合理的、且つ論理的であることは如何なる理論、推論を以て反駁しようと反駁出来ないほどであり、いくら角度を変えて論じても、常に同じ明確な答えに帰結すること——つまりそれ以上にはない究極の科学的真理のみを説くのであることから判断出来るはずで、正論中の正論を展開すべく努力しているのです。そういったことも含め、宗教組織も団体も作るといった覚えもなく、実際作つてもいないことも、『天国シリーズ』を熟読理解し、『慈悲と愛』誌を読まれた方は納得せざるを得ないと思います。

別に宗教人でなくとも、文化人はいふ迄もなく、学者、科学者といえども正しい論理思考に基き、自己を表現出来る人は70%くらいしか居ず、ましてや最新の科学理論を脈絡なく採り入れ、引き摺るような長い特大のソロバン玉のジュズを首から下げた、ク隊長様々と呼ばれるポーズが音頭を取り、体力消耗にしかならない一万回の

お題目を唱えるという凡そ非科学的非合理的な儀式を勵行する創価学会を脱呪術化近代化と断ずる西山氏が、現正法理論を鋭いものはあつても、非合理的の神秘主義としか説明し得ないのは、この人に論理性、科学性が全く欠如しているのかと疑いたくなるのです。「理性原則への倦怠感から超常世界への関心をかきたてる」や、「脱近代化衝動の具体的発現」的新新宗教だと私達の主旨を誤り、分類するに至つてはただ嘩然とするばかり。こういった物の見方が識見、良識として世界に幅を利かせているのもまた実に類型的な紋切り型思考の訓練しか受けていない、皮相的に物事を解釈し、学問は活字を通してしかない文化人・識者層が数多く各国にいるのだということの認識を、新たにしました。神を恐れぬ上に宇宙や自然を目の辺りにしても、敬虔な感動を覚えることのない人々でしょう。

反面、こうした人々は西山氏も含めて、「科学」と名がつけば何でも合理性の固まりと容易に結論し、安心して道を譲つてしまい、そうやって核兵器開発に専念する、上司と自己の榮達にのみ忠実な科学者やカビの生えた左翼思想を信念とする医学者が育つ温床を作つてきたのではないでしようか。

私はもちろん、宗教理論も原始仏教（ブツタにより説かれた）と原始キリスト教（キリストにより説かれた）の純粹な真理そのものである部分以外は信じたくもなく（複雑怪奇な理論には全くついていけないものが多すぎるのです）、オカルトや神秘主義的傾向はむしろ男性が本性的に持つている好奇心の産物として見ていますが——ムキになつて弁護すると言うわけではないのですが、基本的に常識的な立場から奇蹟、靈魂などの靈現象のすべてが、そういった神秘、謎とされてきたことも自然科学界に属することを私は論証したいし、且つ編纂書や機関誌を通して論証してきたのですが、西山氏のいわゆる非合理的な（これは私も大いに賛同します）新宗教が前面に押し出す靈的現象ですら、冷徹な目で以て単なる物質的、三次元的現象と見做すならば、一つの規則性が充分に見出され得るのであり、また、それが出来ないような人であるならば、自らを科学者あるいは学者あるいは文化人と称するのは恥かしいことではないかと私は思うのです。

おおよそ宇宙、大自然界の森羅万象を科学する心で見ればすべて分類、分析は可能なのです。コペルニクスやガリレオやニュートンも、真の科学者の目と心を持っていたならばこそ、偉大な真理を人類に示し得たのであり、前述の皮相的な人々であったならば文明は進展しなかつたでしょう。つまり非科学的、皮相的文化人・知識層及びマスコミから進歩は生まれぬし、齎されもしないということになります。

ありとあらゆる物質は化学的に構成され、原子の構造にまで遡れば、素粒子に分類してエネルギー式にまとめられ、また元素によって分類すれば化学式に表現し得るのです。ただ習い覚えた知識のみで、それを応用し、探究の領域を深め発展させる能力がなければ、人類は偉大な先駆者の与えた文明によって、知識や学問によって知的精神的に進歩するどころか記憶するのみで理解を伴わず、知的に高度な文明に住んでいても、精神は原始民族のそれと似て恐怖と狭窄視野で萎縮しており、高度な文明の価値を理解することも統御することも可能でないままに、低俗なものに引きずり下し、やがては再び文明の滅亡を招いてしまうのです。

西山氏他多くの人々が、極度に息のつまるような科学合理主義の時代、と述べていますが、それは戦争と左翼思想が齎した精神の荒廢によって、世界が心と魂について語るのを忘れていたのであり、実際はこの程度のもので息がつまるようでは全く貧弱な理性と言わねばならないでしょう。それではUFOの開発でさえ覚束ないものです。

別にチャップリンの諷刺したクモダン・タイムズほど世は機械化されてはいないので、強いて機械的思考感情を以て生活する必要もないのです。人間としての精神性と情操とゆとりを失わなければ、日に二、三時間の睡眠で仕事に明け暮れても（七時間はやはり理想的ですが）、自らの精神及び身体の健康を管理出来る人は、常に忙中閑ありの悟りを開いた人であり、その智慧なくして生きるならば、十時間寝て、仕事を殆どしなくても、文明が煩わしく、相も変らず自己喪失をしたまままでいるでしょう。

逆に言えば、いくら合理的社会でも、無駄が多く、非合理的思考と行動しか出来ないのが現代人であり、且つ

今迄の人間であり、人間とは概して可視光線や可聴音以外は自らを適合させることは出来ないのですから、信念として非合理性を貫く人であるならば、個性としてそれも良いのではないかとも思えるのです。別に地球上の陸地をすべてアスファルト舗装するわけではないのですから。

とは言つても、私とて人心の極度の合理化はついていけないものだと感じるこの頃です。やはり喜怒哀楽を自由に表現出来る自然主義者であつて、科学的合理社会の（公害を齎すものはもちろん認め難いですが）妙味と便利さを楽しみ、つまり人間は、宇宙も自然もまましてや自分達の創り出した文明も、智慧を以て管理出来るだけの理性と、自己の内面をうるおす感性とを豊かに持つものでなければ、人間としての眞の価値を持つものとは見做し得ない、とそう思っているのです。

## 電磁兵器最先端

諸星 紀美子

(一)

先日、Yさんから電話があり、その中でTVでもしろい科学ドラマ（BLACKOUT）を放映するとの情報を得た。深夜で、しかもTV朝日であった為、とまどいつつ見た（一テーマを二回で完結する形式で、最先端科学犯罪を、警視庁の科学捜査課（仮称）が、扱うといったストーリーである）。私が見たのは、どうやら第一話であったが、なんとプラズマ兵器による連続殺人事件だった。大槻教授が登場し、某国でのプラズマ兵器開発や、携帯プラズマ発射装置についてコメントしている（このプラズマとは、複数の高周波の交差によって発生する。もともこの現象を米国のベアデン（スカラー波提唱者）が注目し、旧ソ連の最新兵器と指摘したのである）。

この連続殺人事件は、日中突然人が焼失するといったもので、犯人は、パソコンネットで情報を得た小学生であり、気象衛星のデータベースに侵入し、プラズマ発射最適気象条件を割り出して、一般人を光センサーによってターゲットイングし、攻撃するといった衝撃的な内容だった。

このプラズマ兵器は、宇宙人ユミットをして、核兵器を凌ぐ最終兵器であると警告を受けている。最近では、オウムが、レーザー兵器開発と平行してプラズマ兵器開発も行なっていたらしくにわかに、電磁兵器が脚光を浴びるようになってきた。先のドラマを見て、そのリアリティから、ついにこういう時代になったかと思う。ただ言うまでもないが、私たち正法を学ぶ者が、注意しなければならぬのが、こういった電磁兵器が左翼陣営の手中にあり、今もって大いなる野望達成の手段として用いられているこの事実である。

その意味でプラズマ兵器、またはベアデンや、マトリックスⅢ（スカラー波を非ヘルツ波として紹介している

書物）を取り上げる日本の研究者（飛鳥氏、実藤氏、木下氏等）は、リベラルであったり、新興宗教関連者だったりと私たちにとつては、たいへん残念である。

だから尚さら時代に先駆けて、スカラー波攻撃による被害を、思想犯罪というカテゴリーで警鐘してきた第一人者が千乃先生であることを改めて感じさせられた。

（九五年十一月）

（二）

前回の科学トピックス掲載後、Yさんよりいくつかの情報提供を受けた。そのなかに、プラズマ兵器開発に関する新聞記事があった。大変興味深いものなので、今回はそれを紹介しようと思う。

ロシア 戦略ミサイル迎撃兵器——米に共同実験提案へ

エリツイン・ロシア大統領は三日からカナダ・バンクーバーで行なわれる米口首脳会談で、極秘理に開発されたロシア製兵器「プラズマ・ビーム砲」を用いての戦略ミサイル迎撃実験を米口合同で行なうようクリントン大統領に提案する見通しである。

イズベスチヤ紙が一日報じた。「トラスト（信頼）」と名付けられた迎撃実験は、エリツイン大統領の呼びかけに基づき昨年からは米口共同研究が始動した「対限定ミサイル攻撃防衛網（G P A L S）」構想の一環として提起される模様だ。

同紙によると、ロシア側は、米戦略防衛構想（S D I）枠内のミサイル迎撃実験が行なわれた太平洋のクエゼリン環礁を実験拠点に見込んでいる。陸上基地、洋上のエネルギー発生装置から高度に集積したプラズマ

を弾丸として発射。飛来するミサイル弾道を高度二〇〜五〇キロで破壊する。

この計画には、かつて核弾頭製造に携わった秘密都市アルザマス16の「実験物理学研究所」など各軍事技術開発機関が参画している。同兵器開発で「先行している」ロシアが主要部分を担当、米国には資金のほかコンピュータ技術の提供を要請したい意向だ。

ロシア側は、この兵器の開発が「既に屋外実験の段階に達している」とした上で、米ロ合同で開発すれば米国独自開発の場合に要する費用の百分の一(二億ドル)で済む、と主張している。

旧ソ連軍部が、エネルギー密度の極めて高い、電離した高温ガスであるプラズマの兵器利用に取り組んでいた事実は早くから知られていた。だが、「プラズマ・ビーム砲」の開発がどこまで進んでいるかは未確認。(後略)

〔読売新聞〕平成五年四月二日朝刊より)

(補足…『産経新聞』平成五年四月三日朝刊にも同様の記事あり)

日本の三大紙の国際面に堂々とこのような記事が掲載されていたこと自体驚きに値するが、旧ソ連時代から既にプラズマ兵器を所有していた可能性が高く、世界の共産化に一役買っていたかもしれない。

ここにきて多くの読者の方は次のように感じているだろう。

『なるほど、プラズマ兵器については、その現実性が分かってきたが、今千乃様を攻撃しているスカラー兵器との関連は?』

これについては、次回触れようと思うが、ここでキーポイントになるのは、リーサル・ウエポン(殺戮性兵器)とノンリーサル・ウエポン(非殺戮性兵器)の境界、もうひとつはマックスウエルの電磁方程式にある、距離の二乗に反比例して減衰する電磁波とそうでないもの、この二点である。

(九五年十二月)

(三)

戦略上、敵に対しその施設、人命等への被害を最小限にとどめ戦闘不能にさせる目的を達成するのがノンリーサルウエポン（非殺戮性兵器）である。

それは多種に及ぶが、そのなかで、電磁兵器関連からみれば、マイクロウェーブ兵器、電磁パルス兵器、低周波発生兵器があげられている。これは主に機器類の制御部品にダメージを与えるが、マイクロウェーブは、人体に発熱をおこすことが確認されている。低周波発生器においては、建造物を通過し、内部の人間の生理現象に不調を与え、戦意を喪失させる。

では、千乃先生に対する攻撃を考えてみよう。もし、これら電磁兵器で攻撃するならば問題が起こる。第一に発生出力の問題（かなりの電源が必要）、第二に電波管理法の問題、第三に発射照準の問題（遮蔽物）、第四にシールドが、比較的容易であることがあげられる。千乃先生に対する攻撃も当初は、この電磁波対策が検討され電磁シールドが使用されたということだが、無効に終わっている。その後、天からの示唆とそれを受けた小賀様の尽力で攻撃の正体が明らかになったとYさんから聞いている。Yさん曰く「敵の目的は、証拠を残さず、先生を暗殺することである。それは回りに悟られず弱い毒をもって、少しずつ体を弱らせて殺すような完全犯罪を狙っている。そのために、社会的に凶器とは認知されないものを使用することが必要となった。」まさに社会に凶器と認知されていないもの、これがスカラー波発生器なのである。これはテスラーが浸透性の強い電磁波として扱ったといわれるいわゆるテスラー波、このあたりに端を発するといわれ、旧ソ連がいち早く研究開発に着手したと言われている（そのことは、近年米国の科学者が、ロシアのアルザマスにある研究所を訪問した際にもそれらの研究が進んでいることを確認している）。ここでスカラー波発生器そのものに深く触れることは今回は避けることにするが、敵が扱っている攻撃手段は、その目的上ノンリーサルウエポンであり（致死性兵器使用の場合は事件性を帯びてしまい目的が果たせない）、対生物兵器であり、現在の電磁兵器のカテゴリーにまだ登場していない

極秘兵器である。

これが各国要人への攻撃に使用されているとの警鐘を千乃先生がなされたが、まさにそれは、今後拡大していくだろう。真実を叫ばれる先生の御存命中にこのスカラー波攻撃の問題が、社会に正しく認識されることを願いたい。

(いままで紹介してきた実用段階にあるプラズマ兵器は、その性質上致死性兵器であり、対戦開機器を主体にしている。その発射には、大出力の高周波ビームを必要とし、プラズマの発生には一億ワット/cm<sup>2</sup>以上の出力密度、 $10^{11}$ — $10^{12}$ ジュール/cm<sup>2</sup>以上のエネルギー密度を必要とすると言われる。プラズマ状態のなかで多数の電磁波が交差しており百八十度位相がずれた電磁波が重なると打ち消し合って現代物理では、ゼロの状態であるとしているが、ベクトルではなくスカラー(量)として存在すると欧米の研究者が指摘した。スカラー波発生手段はこのほかにも存在するとされている(S波の搬送波が電磁波であると言われることや、S波そのものからの二次放射が電磁波であるため、S波発射に関して電磁波との関連については充分考慮に入れる必要がある)。プラズマ兵器の場合は副次的にスカラー波が発生しており兵器としては、その熱量や発生時に生じる爆風によってダメージを与える。)

参考文献

殺さない兵器

江畑謙介(光文社一九九五年)

(一九六一年一月)

(四)

前回の内容に思いもよらず、天上界からコメントをいただいで、攻撃のあり方についてその洞察と分析の深さに出る言葉も失ってしまった。今後いかなる方向でこのシリーズを進めていこうかと、悩んでいたが、

ちようどその頃編集部から連絡があつた。「離反者からの手紙が先日J-I出版に届きました……その中で諸星氏のマインド・コントロールがとけてこんなばかな原稿（電磁兵器最先端）を書かないようお願いしたい」と書いてあります。このような訳ですので今回も頑張つて下さい。原稿お待ちしております。」

ますますプレッシャーがかかつてしまったが、幸いにもYさんより、おもしろい資料が送られてきたので、今回はそれを紹介しよう。

#### 高圧線下でミステリーサークル発生

情報源は、ミステリーサークル研究者からのものだが、日時は一九九一年六月二十八日、場所は北海道滝川となつている。発生状況は、高圧線下の麦畑で、丸いオーソドックスなミステリーサークルである。麦は元の高さ八〇cmで、サークル内では倒れて反時計回りに渦を巻いている。麦は折れるのではなく、曲がついていたという。

地元新聞に載つた近くの高校物理教諭のコメント

「高圧線の影響で、静電気による空気のイオン化が起こり、プラズマ現象（注）が起きた可能性がある。」  
研究熱心なる読者は気付かれたと思うが、これは、天上界が先月のJ-I誌で示唆されたことと関連している。巧妙なるプラズマ致死性兵器への警告を改めて認識する必要がある。そして、敵のアンテナ工作に断固立ち向かい、社会問題として提起しなければならぬ。

今後も私達は、このように千乃先生を通じ、天上界からの御指導のもと問題解決へ一步一步進んでいくのである。

（注）プラズマの発生のさせ方と環境次第で、サークルが発生することが、シミュレーションによりわかつており、それに基づく見解と思われる。

（九六年二月）

(五)

スカラーとは方向を持たない量を意味し、ベクトル(方向を持った量)の対義語である。スカラー電磁理論において、スカラー波は、ポテンシャル(潜在的)電磁波として扱われている。

スカラー波を理解するうえで、スカラー電磁理論提唱者トーマス・E・ベアデンの存在はさけて通れない。

今回は一九五〇年代から、モスクワの米大使館でおこった旧ソ連による、電磁波照射事件や、ベアデンの主張を紹介し、スカラー波による対生物戦の片鱗をのぞいてみたい。

電磁波攻撃に晒されたモスクワ米大使館

一九五二年にモスクワの米大使館で、マイクロ・ウェーブを利用した盗聴装置が発見された。これは共振現象を利用したもので、金属カップセルにマイクロ・ウェーブを当てて共振させ、不可聴性周波数(二三〇メガヘルツ)を発生させる。それを受信機で取り出して盗聴しようという仕組みである。……カップセルはソ連から米国に贈られてモスクワの米大使館に掛けられてあった米国の紋章(白頭鷲をあしらったもの)の中に、埋め込まれてあった。それを発見した米国は激怒して、国連にその紋章を持ち込んで抗議したが、今日ではこのような盗聴手段が行われているかどうかを探知できる装置が開発されている。……

このモスクワの米大使館はソ連の盗聴作戦の一大標的とされたが、一九六〇年代初めには、大使館の反対側のビルから電波が大使館に向けて照射され始めた。電波照射は一九七九年まで続いて米国の抗議により停止されたが、その目的についてはいまだに明かになっていない。……

——『殺さない兵器』(江畑謙介)

この資料の最後に「その目的がいまだに明らかになっていない」とされているが、ベアデンによって、まさに

これがソ連のスカラー電磁兵器の対生物戦へのプロローグとみなされている。次にベアデンのこの事件にたいする見解をみてみよう。

モスクワの米大使館職員をターゲットに

五〇年代の初期には、ソ連はモスクワのアメリカ合衆国大使館に、合衆国大使を目標に定めて、弱いマイクロ波照射を始めた。これは、アメリカ合衆国の注目を最高のレベルで浴びること保証付きの事件であった。目的は、新たな技術でアメリカを刺激し、大使館側でどのような反応をするかを見るためのものであった。つまり、大使館での私たちの技術的な反応を見ることによって、私たちが Whitaker (注) ポテンシヤルや、包含された電磁基礎構造や Kazacheyev 電磁誘導性疾病などについて知っているかどうかを「大使館への刺激」を通してソ連は知ることができたのである。私たちのスカラーに対する対応が完全に欠落していたため、私たちは自分たちが通常の外部的電磁場のみについてしかまだ知らないということを、ソ連政府に明確に示したのである。私たちは、その決定論的内部構造が細胞生物学的情報を構成している包含電磁 Whitaker ポテンシヤル波について全く知らなかった。この隠された場の情報内容とは、三人の大使を含む大使館職員全員に特殊な疾病を発生させるためのものであった。

(注) Whitaker 波、Aharonov-Bohm 効果、および、隠された変数——Whitaker の一九〇三年論文は現代量子力学の (Bohm の) 隠された変数理論 (HVT) に先立っている。一九〇四年の Whitaker 論文 (これは遠距離に置いてすらスカラー電磁気ポテンシヤルの干渉が電磁気力を作り出すことを示したもの) もまた、Aharonov と Bohm の生産的な一九五九年の論文に先立っている。これは、電磁場力の全く存在しない中で、Whitaker のスカラー干渉計効果に関する彼らの予言といったものや、力場についてよりも、むしろ電磁気ポテンシヤルについてを第一としたものであった。

——『Grabiology(1991)』(トーマス・E・ベアデン)

ではなぜ当時の米国がソ連の意図に鈍感であったのか、その根拠について、ペアデンは次のように述べている。

ソ連の電磁生物戦にたいする技術的根拠

国務省、DoD、CIA、DIA、FCC および、他のアメリカ合衆国政府機関の科学者達は、彼らがスカラー電磁気学を理解するまでは、ウッドベッカー（きつつきノイズ）のような電磁送信器の生物戦（BW）能力を完全に理解することはないであろう。また、それらのシグナルに含まれている特定の生物学的情報を計測するための新たな装置を開発することもないであろう。この著者によって前に指摘されたように、一般的（古典である）電磁気学は、マクスウェルの真の4次元電磁気理論の相当の部分が切り取られたバージョンとしてヒービサイドとギブスによって作られた。

一般的電磁気（および、その具体性を与えられたエネルギー）は、私たちが言及している能力を示すことができない。また、特殊なスカラー電磁送信器は「生物の死亡と病気を齎す光線」を可能とするが、一般的電磁気はそのような結果を作り出すことはない。その代わりに、ヒービサイドとギブスによって切り捨てられた、マクスウェルの4次元電磁気理論に含まれるスカラーの部分回復し用いなければならない。

マクスウェルの元々の理論は、4次元のスカラー構成要素の中のベクトル電場および、磁場を包含した関数によって捕えられる電磁重力的特徴を有する、電磁気及び重力（G）を統合した学説だった。従って、マクスウェルの4次元理論は、例えば、スカラー波を（捕捉された）純粋なポテンシャル電磁気エネルギーとして規定している。そこでは、このポテンシャルエネルギーは、隠されているが決定論的に組み立てられた内部双方向性電磁波パターンを含んでいる。ただし、決して外部の電場と磁場の合力は全部のベクトル加算に現れてはいない。4次元のスカラー構成要素のシンブルなテストによって、この事はたやすく発見できる。隠された決定論的電磁気基本構造としての特徴を持つこの純粋なスカラーポテンシャル（波）は、ヒービサイドとギ

ブスによって完全に切り捨てられた。それは、たとえそれが実験的に実証することができ、テストすることができるとしても、古典のベクトル電磁気理論には、現在まで省かれたままである。……

ポテンシャルが重力であることは知られているのであるから（ポテンシャルは捕えられたエネルギーから構成されていて、そして、重力エネルギーである）、スカラー電磁気は電磁気学及び重力の統合された学説なのである。それらの統合されたスカラー場は、隠された内部構造と共に、より多くの制限を持つ古典電磁気力場よりも、多くの能力と用途を持っている。

この四十年間に、ソ連はこのスカラー電磁気・重力理論と技術を秘密裡に開発した。彼らは、エネルギー論と呼んでいるが、そしてソ連は、巨大なパワーと驚異的な能力を持った秘密の統一場理論（UFT）スーパーウエポンを開発し、配備するために、その理論を使用した。

——『Gravitobiology (1991)』（トーマス・E・ベアデン）

一般に知られているマックススウエルの電磁方程式では、電界と磁界が、空間を波動として伝搬可能であり、その波動を電磁波と定義している。この電磁波はその方程式で、距離の二乗に反比例して、減衰するとされ、周波数によるが、伝搬については空間中の障害物、気象条件などさまざまな制約をうけるとされている。この方程式から、二名の学者がスカラー・ポテンシャルの部分を削除したとベアデンは解説している。ソ連は早くから、そのあたりに注目し、開発を行っていたが、米国はそれに遅れをとったわけである。

千乃先生に対する攻撃が、一朝一夕には解決しない理由を、多くの読者の皆様は、ベアデンの主張から読み取られたと思う。しかし、一方でこの古典方程式の問題は検討されており、希望的観測かも知れないが、そう遠くない将来において、スカラー波に対して画期的な対応が可能になるかも知れないことを付け加えておきたい。

（九六年四月）

このままでは、自然界のバランスをも壊しかねないプラズマ波とS波の脅威は、必ず地球上の重力バランスをも壊し、この銀河系に異変を齎す可能性も否定し得ません。……その弊害が地球の太陽系惑星としての自然な運行の妨げになるかもしれないのです。〃

これは、エル・ランティ様が本誌九五年一二月号で述べておられた内容である。今回は、前回に引き続き、ペアデンの『Gravitobiology』より、この御示唆に関連した内容を紹介しよう。

#### 内部電磁汚染のいまだ気付かれぬ致死性性質

自然の〃外面化されたエネルギー・バランスに加えて、従来気付かれていなかった自然の〃内部エネルギー・バランスが存在する。この内部エネルギー・バランスは、どのように惑星が汚染されていくのかを考える時に非常に重要になる。この惑星の最も致命的な汚染とは、この惑星や全ての生命システムの生物学的ポテンシャルに存在する内部の〃生命の川が、徐々に、間断なく汚染されていることにある。つまり、私たちは、まさしく生命を維持している外部コミュニケーション及び内部コミュニケーションの〃場々と言えるものを徐々に汚染しているのである。簡単に言えば、私たちは、生命圏内及び生命圏上の生命機構を徐々に殺しているのである。私たちは徐々に死に向かって病んでいるのであり、誰もそのことを知りもしない。

私たちの科学が内部電磁エネルギーやその環境との関係、自然や私たちの生命圏に於ける総合的内部エネルギー・バランスについて十分な知識を發展させない限り、環境問題や生態学的問題について十分に討議し、完全に克服することはできない。

電氣スモッグ（現在私たちの環境を満たしている巨大かつ増大し続ける多量のシグナルによる）の重要性は

強調して強調し過ぎることがない。その未来に対する衝撃も同様である。このスモッグは、地球上に人工的量子ポテンシャルを徐々に作り出している。それは、致死的なクジャミング・ノイズク構造を有し、私たちの遺産である自然の量子ポテンシャルや生命量子ポテンシャルを徐々に汚染している。この汚染は、太陽、地球、月の連結した三重構造の内部汚染をも含んでいる。私たちは、太陽系全域の生命機構を、徐々に毒しているのである。地球のポテンシャルをチャージ・アップするに従って、隠されたコミュニケーション可能な双方向性電磁 Whittaker 構造を通して、そのチャージは太陽や月へと拡散していく。私たちは徐々に私たち自身を消滅しているだけでなく、この三重構造をも消滅させているのである。

生物学的システムの中での、生命エネルギー流動に対するジャンピングの増加による影響は変則的なもの、しばしば、私たちには随時ジャミングとの関係は認識できない程ゆっくりとしたものによって明示されるであろう。このスモッグによる長期的かつ有害な影響は、現在既に起こっている。例えば、私たちの免疫システムに対して、非常にゆっくりとした妨害を行ない、そしてそれは関節炎や免疫抑制に伴った感染症などを引き起こす。また、インフルエンザのような病気も徐々にきつくなっていくようである。

この中で、人工的量子ポテンシャルなるものが登場するが、これがスカラーエネルギーを指している。この説明では、われわれの社会が抱える電気文明の部分に警告を与えている。これは、意図的にスカラー波を発生しているわけではないが、この状況に意図的なもの——兵器としてのスカラー波が、加算されるわけである。しかしこれは、徐々に進行しており、タイトルにもあるように、いまだ気付かれぬ……となるわけだ。

オゾン層破壊の問題のときもそうであったが、かなり前にある学者が警告していたにもかかわらず、破壊の原因となるフロンガスの撤廃が実行に移されたのは、最近である。現在、オゾン層には一部穴があいており、温室効果の危険性が叫ばれつつある。このように人類は失敗して、初めて学んでゆく。この姿勢は歴史の中で、改善

されておらずスカラー汚染の問題にしても、今後の対応が取り返しのつかないことになるであろうことは、火を見るより明らかである。しかし、この瀬戸際で御身体を犠牲にされ、啓蒙を続けられているのが、千乃先生であり、我々にはこの偉大な船頭に従うほか残された道はないのである。そして、地球の存続をかけて戦っておられることを、あらためて心に命じなければならない。

(一九六年五月)

(七)

この電磁兵器最先端シリーズも、はや七回目を迎えることとなった。ふりかえれば、プラズマ兵器の紹介から始まり、その狭義な意味におけるスカラー兵器との関連、そして、その理論提唱者の著作紹介へと至ってきた。スカラー理論提唱者ベアデンによれば、現代物理学とスカラー理論の間に、大きな溝を生じさせているのが、マックスウエルの電磁方程式の解釈ミスなのである。今回はその根本問題について、触れたいと思う。

問題は私達の頑固なものの考え方にある

電気物理学、電気エンジニアリングの分野において、西側では、数十万もの博士課程修了者がいるにも拘わらず誰一人として、彼らがマックスウエルの方程式として教わったものがマックスウエルの方程式では全くないということを知らないということは、全く信じられないことである。ジェームズ・クラーク・マックスウエルによる本、論文にヒューブサイドとギブスは一度として登場したことがない。それをほとんど誰もチェックしたことがない。誰もマックスウエルの四次元理論に戻ってヒューブサイドとギブスが正しいベクトルの解釈をしていたかどうかを見ようともしない。Henry Moneth 博士と数人の著名な科学者を除いて、マックスウエルの四次元理論の原文は既に、皆の捜し求めているはずの、重力と電磁気力のマジックのような統一理論となっ

ていることに西側の誰も気が付かないようである。それは既に工作可能なフォーマットになっている。それは実験用の台の上で工作可能であり、うまく働く。

——『Grahobiology (1991)』(トーマス・E・ペアデン)

このなかで、「重力と電磁気力のマジックのような統一理論」とあるが、まさにこれが未だ現代物理学の越えられないハードルとなっている。ところが、最近Yさんより送られてきた資料に、大変興味深いものがあつた。それは、このハードルが越えられつつあるというようにも感じられる画期的内容だつた。

「世界を変えるフリー・エネルギー」(「ムー」学研一九九五年九月号)より

オリアリーは、この0点エネルギーを電磁氣的エネルギーの一種であると考えている。

「宇宙にあるエネルギーはすべて一種の電磁氣的エネルギーだということができます。たとえば、これまでの物理学では、電磁力と重力は別のものだと考えられてきました。けれど最近では、重力もまた電磁力のひとつの働きにほかならないという論理が、正統的な物理学界の中でも認められるようになってきています。九四年にハロルド・プトフ博士が権威ある学会誌「フィジカル・レビュー」に載せた論文の中にその内容があります。

つまり、ハチソン効果の反重力現象は、0点エネルギーという強力な電磁力を使って引き起こされたという論理が成り立つのです。」

……宇宙にあるエネルギーはすべて一種の電磁氣的エネルギーだと……これを見て、研究熱心なる読者の方は、気付かれたと思う。どこかで見たような……そう！それは、何と十四年前の「J-I」誌——千乃先生の「読者への連絡」の中にあつた。

日立製作所が、ワインバーグ博士とサラム博士の理論（「弱い力」と「電磁気力」を統一したもの）の前提となる「電子は磁場とは無関係に動かしうる」との理論を検証したことに關して、物理学はこれからこの「弱い力」と「電磁気力」の統一に加えて、「強い力（核力）」と「重力」を加えて総ての力を統一した理論を作ろうとしている所です。うまく行けば重力の制御が可能になると期待しているという内容でした。

一言言わせて頂くなら、そしてここにある文をそのまま素直に解釈するならば、その全種の力の統一理論はすでにミカエル様が一昨年から主張なさっていたことで、宇宙にはいわゆる電磁気力の強弱しか存在しないというものです。

学者が名附けた雑多な名称の電磁波があつても、星の爆発や核融合から産み出されるプラズマの粒子は宇宙の何処から飛んできて同種のもの、星から四方八方に放射する電磁エネルギーが、星の自転・公転によつて重力（引力）となり、磁力線であるがゆえに地表の諸々の物体を引き留め、且つ他の星や惑星・衛星をも牽引する力となつているし、又、一つの恒星系内の重力の集合エネルギーが他の恒星系に影響を及ぼし、牽引力となつて働いている。

又、量子力学理論による法則はニュートン力学ではないとするのは誤りで、実は原子、分子内の安定は陽子・中性子の核が核力即ち電磁気力の引力によつて原子内の電子を引き留め、地表の大気圏内を物体が自由に運動するように核力と核内部の陽子同士の斥力とのバランスの取れた領域を自由に電子が動く——というもので、ニュートン力学の法則を外れる物では決してないのです。何故ならばマイクロもマクロも同一の法則の下になければ、自在に形や強度を変化させれば、必ず何処かにバランスの不統一、不均衡が起こり、例えば生命体や物体の（限界はあつても）形の変化がスムーズに行われず、すぐ小爆発、破壊が生ずるはずです。恒星、恒星系に關しても然り、統一された力もしくはエネルギーの法則の下にあるから、容易に物体の崩壊が起こらないのです。原子の中の電子も分子内部の電子もすべて回転運動をしている、大気圏内の粒子も回転運動をして

いるから、安定しているものであり、且つ検知出来ないほどの微小磁場として互いの微量な回転する電気エネルギーが引き合ったり、反発したり、実は周囲の流動的に混み合うより大きな電磁場に引きつけられて、大気圏内を自由運動しているかの如くに見えるに過ぎない（原子・分子内も同じ）というものです（電氣的に中性であるものは、大気の流れの中のはこりのように、風の中の木の葉のように、周囲のエネルギーの流れに動かされていゝ）。従つて「電子を動かすのに、磁場が無関係ではあり得ない」という他の学者の理論を正当とするものなのです。

ミカエル様によれば、宇宙に自然に存在する粒子には次の運動しかない。即ち、星の爆発による推進力と星の運動（重力）に影響を受けるもの、及び電磁場に引っぱられたり、はね飛ばされたり運動、であるそうです。即ちアイザック・ニュートンの偉大な発見を否定するものは全宇宙には存在しないということです。

（『J』一九八二年九月号より）

ミカエル様のコメントから、十数年の時を経て、地球の科学もようやく重力制御への門を叩いたところだろうか。千乃先生への左翼勢力によるスカラー波攻撃……この問題の解決が、二十一世紀の人類のあり方をあらゆる意味で方向つけることは、間違いなさそうだ。

（九六年六月）

（八）

このシリーズは、当初わかりやすく、電磁兵器の最新情報を提供することを目的に、スタートしたが、私に情報を提供して下さる方々のおかげもあって、スカラー波の核心的部分にもふれることができた。同時に、多くの方から質問をいただき、その中にはもつと基本的なことを知りたいというご要望もあったので、スカラー波の

基本性質について、電磁波との比較を通して、ふれたいと思う。

読者の皆様は、スカラー波は、縦波という記述を、よく関連書籍で目にされていると思う。電磁波は横波である。なぜスカラー波が、縦波なのかという問題にはいる前に、そもそも電磁波とは何なのか、縦波と横波の違いは何なのか、今回はそれを簡単に説明したいと思う。

まず電磁波の定義を辞書でみてみよう。

でんじは【電磁波】

電磁場の周期的な変化が真空中や物質中を伝わる横波。マクスウエルの電磁理論により、光やX線が電磁波にほかならないことが示された。(広辞苑)

すなわち電磁波は振動する(周期的変化)電場と磁場によるもので、その周期的な変化は、次のようになる。

周波数 $\nu$ (ニュー) 周波数(振動数)を表す。一秒間におこる振動の回数、単位Hz(ヘルツ)

波長 $\lambda$ (ラムダ) 波長を表す(ローマ字の $\lambda$ に相当、length)。真空中で一回の振動によって電磁波の

進む距離。

光速度  $c$

真空中での光(電磁波)の速度を表す

先の波長と周波数の関係式は、この記号のもとで次のようになる。

$$c = \nu \lambda$$

電磁波の伝わる速度  $c$  は真空中で約  $3.0 \times 10^8$  m/s (30万 km/s) である。例えば、周波数 30 MHz の電波(電磁波)のなかで送受信可能なものを電波という)の場合先の法則に従えば、

$$\lambda = c / \nu$$

$$c = 3.0 \times 10^8$$

$$v = 30M (3.0 \times 10^7)$$

$$\lambda = 10m$$

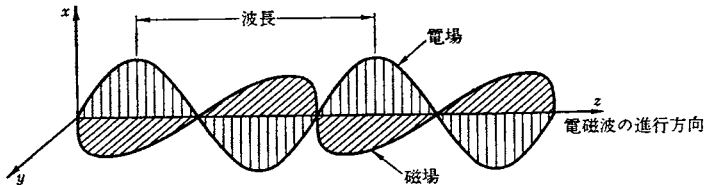
この電磁波は、横波であるが、この横波とは、媒質の振動方向と波の進行方向が垂直な進行波であり、電磁波の場合、電場と磁場が進行方向と直行している状態を意味する。

では、スカラー波の基本性質といわれる縦波はといえば、波の振動方向と進行方向が一致している。わかりやすくいえば、縦波とは、音波などのことである。音波では、空気が伝わる方向に振動している（粗と密の部分が発生している）スカラー波を、テスラーは電気音波と呼んだといわれる。物理を専攻されていない方には、この縦波、横波のイメージが、まだ充分ではないと思うが、この電磁波における横波、縦波の問題は、専門に電磁気学を勉強していないと正確にはわからない。電界Eと電束密度D、磁界Hと磁束密度Bから構成される、現在知られているマックスウェルの基礎方程式からは、縦波の解は導き出せない。ベアデンの言うところの二名の科学者に削除されたポテンシャルの部分にその秘密が隠されているようである。

天上界は、『天国の扉』が発刊された時、多くの科学者が天の元に集うことを、期待された。千乃先生が左翼勢力の陰謀によつて、大変な状況にある今、悪との科学力の差は、致命傷になる。天上界、千乃先生の元に集う私達は、いまだ知られていない法則を明らかにし、ユートピア建設の為、正しく科学を使うべく、最初から義務づけられていたことを思い起こしてほしい。

参考文献 理化学辞典（岩波書店）

（九六年七月）



最近、読者から、本シリーズの感想が寄せられていることを編集部から知らされたが、それによると理科系の方々の興味は、「マックススウェルの電磁方程式から削除されたスカラー波部分」に集中しているようである。やはりここに来たかという感じだが、実は、今まで紹介したベアデンの『Gravibiology』の和訳は、どこからも出版されておらず、おそらく日本の研究者でもその内容を取り上げている人はいない。それゆえ、理科系の識者は、新鮮かつ衝撃的なものを感じとつたのだと思う。ただ『Gravibiology』の中に、マックススウェルの元の方程式から、何がどの様に削除されたかは、詳細に記載されていないため、マックススウェルの元の方程式と、現在物理学で提示されているところのマックススウェルの方程式を比較検討してはどうかというKさんからの提案があり、現在学術資料を検討中である。

今回は前回に続いて、スカラー波の性質について紹介してゆこう。スカラー波の性質である縦波は、進行方向と振動方向が一致している波で、液体や気体といった流体内を伝わる、これが音波に代表されることは前回述べた。これは伸び縮みの波、すなわち荒い波とそうでない部分をもつ粗密波ともいう。これに対し電磁波の持つ横波の性質とは、進行方向と振動方向が垂直であり、これは、固体内を伝わる波にも見られる。固体内の波は、縦波と横波の両方が生じているが、これは、固体内には、流体と違い弾性があるため、隣接し合った部分で引き合う力と、横にずれあう力が発生する。このずれ弾性が横波を発生させている。電磁波でいえば、その進行方向に対して、電場と磁場が垂直に振動している状態をさすのである(注)。

スカラー波の縦波性質の学説の起源はやはり、ニコラ・テスラ(一八五六―一九四三)にあり、「真空中で、横波である電磁波は伝わらない。電気的音波(縦波のスカラー波)こそが真空を伝わる」と主張していた。これは、スカラー波が真空中の場のゆがみであることを示唆しており、真空に粗と密の部分が発生しているのである。音は空気のゆがみであり、スカラー波も音も縦波なのである。なぜスカラー波が縦波なのかという根本問題につい

ては、ベアデンの指摘するところの「マックススウェルの電磁方程式から削除されたスカラー部分」の調査を待っていたらきたい（物理専攻の方は、現在知られているマックススウェルの電磁方程式からは縦波成分が、導き出せないことはご存知だと思ふ）。

あえてスカラー波のイメージがまだ掴みにくい方のためにわかりやすく申し上げるなら、「スカラー波とは、私達が物質と呼んでいる世界の根源的な力場のようなもので、現在の知られている地球の科学では、まだ完全に理解されていない。存在しているものすべてが電磁波の強弱であるならば、スカラー波はそれと表裏一体で存在する。スカラー波は重力波ともいわれ、そのことは、電磁力と重力の統一を示唆している。このスカラー波が人工的に発生させられ、例えば兵器として応用された場合、その出力いかんで効果も変化するが、生態系に与える影響は絶大であり、細胞の不活性化や遺伝子への影響も憂慮される。」

実際のところベアデンの著書には、頻繁に数式が登場し、スカラー波理論を完全に理解することは、大変難しい。それで、比較的イメージの掴みやすいスカラー波の縦波的性質を簡単に紹介した。このシリーズを読みスカラー波についてもっと知ろうという気になっていたただけのなら幸いである。

このスカラー波の完全説明が、まだまだ今後の科学の発展に拠るところが大きいということ、それがゆえに千乃先生を通じて出される天のメッセージには、地球の科学を凌駕した、重要な示唆が織り込まれていることを見落としてはならない。

(注) 光の波動説に理論的基礎を与えたとされるFresnel(1788-1827)が一八一一年光の媒質としてのエーテル(当時空間を満たす媒体としてのエーテルが仮定されていた)が弾性体であるとし、光はそれを伝わる横波であると唱え、なおエーテルの圧縮に対する弾性がきわめて大きいために縦波は瞬時に伝わり平衡が成立するとしたが、それは後の電磁波理論で否定された。

(一九六年八月)

# 第四章 「天上界からメツセージ」

(『J I』一九九五年一月～一九九六年八月号より)

## エル・ランティ

千乃様への左翼ゲリラ（民青、民商、民医連の三者総力結集、全国メンバー動員による組織的ゲリラ戦）は今も日々キャラバン・メンバーをマインド・コントロールし、顔を見られても構わず肉迫・接近して個人車用搭載兵器を用いて攻撃をくり返し、段々露骨になってきております。中には地域の居住者を装って、わざと警官を偽証電話で呼び出し、キャラバンのシールドの弱い箇所にマインド・コントロールした数台のパトカーを散開駐車させ、近くに居てわざと大声を挙げてキャラバンをなじったり、警笛を鳴らしていかにも交通妨害をされて腹を立てているが如きアピールを常に演じて見せる。また、情報によると、ある市に戦略司令室（コンピューター操作室）を設け、七、八名常駐で、千乃様のキャラバン隊を追尾、攻撃するゲリラ

車からの通信を受け取り、指令を逐一出すなど、組織的に訓練を受けた民青メンバーがゲリラ隊の中心となって民商やシンパなどをチェスの駒のようにうまく動かす連繫行動の迅速で巧みな戦法は、長年月、金融機関からの資金強奪作戦、グリコ犯などのステージ犯罪の連繫行動。法網をくぐって地下にもぐる。逮捕の手を巧みにかわし逃れるなどの熟練の手口と戦法を充分臭わせるものです。

自分達は殆ど大つびらに他人の電話盗聴を行なっているのに（正法関係はモニターと両方で、クリスマス・ケーキや寿司の注文まで先取り、ゲリラが食べてしまう悪辣さです）、かつての公安の共産党幹部宅への初歩的な盗聴手段を非難し、大々的にマスコミ・キャンペーンを展開、恐慌を来たした警察庁を愚弄して公安活動を凍

結させるに等しく、公安誌まで廃刊させ、日弁連の誘導でイデオロギー犯罪に手も足も出せない状態にしてしまおう。

旧ソ連の保安本部も内務省も顔色なしの地下活動振りなのです。その熟練度から見れば交通課の警官を操るなど赤子の手をひねるより易しいものでしょう。

彼等は無知、無心な人物を装うにも長けていて、千乃様を擁護するキャラバン隊の一〇番内容は必ずクク気味悪い車が何台も道路を何時間も占拠しているククなど、善良な市民の如き発言で警官の義侠心をあおり、警察官立ち会いの下でキャラバン隊を非難するグループも現われる。暴走族や非行グループ、ヤクザ、労働者（ダンブカーの運転手など）を装い、キャラバン隊に難癖をつける。あらゆる悪智恵を用いて千乃様の拷問を行なうと同時にキャラバン隊の疲労を誘い、睡眠や食事の時間になると必ず交通課の警官を寄越し、理由を設けて追い立てる。それでキャラバン隊の戦意喪失を計るなど、人海戦

術の巧みさも併せて共産主義政権、政策に関しては、いかなる国のいかなる組織も同質のものであることを確信させます。

それがゆえにも、今は左翼組織の陰謀であろう、ソルジェニーツィン氏の殆どの著書や文革に三世代を生きた鴻氏の著書、北朝鮮収容所脱出記など重要な共産圏の政府の犯罪記録が書店や図書館から姿を消し、絶版のものもあるそうですが、何とか手に入れて、そういつた国の真実を知りたい人々は是非一読するべきだと思えます。そうすれば何故千乃様個人への執拗な、そして人間ではない悪辣な組織的イデオロギー犯罪が白昼堂々と連日長期に亘って行なわれ、警察はそれについて殆ど知らないという奇怪な事件が存在しているか理解し得るでしょう。

キャラバン・メンバーは疲労の重なる中、ピーム攻撃があるとすぐにノイローゼ状態になり、千乃様を心理的に見棄てる行動パターンはまだくり返され、それについてはあまりに無反省で、八正道も逸脱して肯んじない限りにおいては、周囲への影響が

非常に悪く、千乃様を苦しめるキャラバンになってしまふので、私もラファエルも容認は出来ず、やはり裁きの対象となるのは止むを得ません。

一貫して天と千乃様の為にまた、良く理性を働かせてゲリラの惑乱作戦を見抜き、千乃様とゲリラの幻惑を峻別し得る知恵のある人のみが、この長期の試練を通じ、天のメンバーたる資格を得るものとなるでしょう。現在のところ、それは数名のみで、他方、敵味方を混同し、千乃様を非難すればビーム攻撃はなくなると思い込み、千乃様や私達天を信頼する術を知らない、非論理的で非理性的な人々は執行猶予付きの消滅宣告。そして、明らかに背反し、千乃様を外部に中傷、讒言する者は、実刑相当の宣告を受けることになります。

今は、最後の審判に当たる時であることを忘れている人々も居るのでしよう。折角初期に活躍した人々があまりの左翼の巧みな戦術に惑わされ、消滅宣告を受けてしまったのは返す返すも残念なことです。更に、内部で宣告されても、誌上で未発表の人々はやはり、条件を付けての

明記が必要であろうと思います。そうでなければ、真に反省をなし、何とか天に再評価をとの努力もなされず、自らの魂の研磨も行なわれないうちだろうと思えるのです。

十七日未明の神戸、淡路島を含む兵庫県南部を襲った内陸の直下型地震（M7.2）は、都市型地震としては戦後最大級であるとのことですが、天が自ら助けた人や助かったその周辺の人々が奇蹟として報告されています。背反した人々には助けの手は伸びなかったので、彼等を助けようとするサタンの手が届かない限り、被害を蒙ったでしょう。現在迄の種々の天災、人災を正法者は生き延びています。しかし、千乃様が亡くなられて後、あなた方が天の評価を得られなかった場合は、天災についてはそういった救いはないものと覚悟しなければなりません。更に大規模の天災もあり得ます。その上に更に共產主義が蔓延れば、後進の社会・共産主義国と同様、あなた方の苦しみは人生で最大のものとなるでしょう。現在のキャラバンにおいては特に

人の心理や行動がはつきり露呈されますが、総てを私やラファエル及び他の天の（同盟星の）メンバーは、千乃様と共に日々接し、記憶しております。それを考えに入れずに無軌道にあるいは偽善に満ちて、千乃様を陥れるような防衛面の手抜きをし、シールドを不完全なまま放置、ビームの侵入を許るならば、いつも警告しているように、必ず天より裁かれるものとなります。それをあえて行なうのは無謀の極みでしょう。

少し長くなりますが、最近の画期的な天文学関係のニュースで、獵犬座の西のはずれにあるNGC 4258（私達の銀河系から二千万光年離れた渦巻き銀河）の中心に、太陽の三千六百万倍の質量を持つ「巨大ブラック・ホール」が存在する確証をつかんだと日米共同研究グループが一月十二日に英国の科学専門誌「ネイチャー」に発表されたそうです。これだけの質量が星の集団として存在すれば、すぐ衝突して壊れてしまうので、巨大な質量は「巨大ブラック・ホール」に間違いないと結論づけられたとあり

ます。ブラックホールは巨大な重力で、周辺の物質を吸い込み、光さえも脱出出来ない天体との定義がありますが、三千六百万倍の天体が単体で存在する訳はなく、以前、西澤氏と千乃様間を往来した私自身の隠密行動中に、小賀竹留様と以前に電話で千乃様を通じ、話し合ったように、これは古い宇宙銀河系の中心から（ホワイト・ホールを通つて）少しづつ流れ出てきた重力波が集まり、新しい宇宙を形成、それが成長して（どんどん古い宇宙から流れ込んできて増えていくこと）、渦巻き運動に移り、周辺へ拡散していく、それらが新星化したり、種々の恒星系を形作つていく頃には中心に流れ込んでいた太陽よりも大きな恒星が老年化し、速度も遅くなり、回転運動も少なくなつて、中心に滞まる。同様に中心近くの恒星も年齢的に古いので、不活性化し、そういった星が彗星のたまり場のように中心にふき寄せられて、たまり場を作り、三千六百万個の太陽といった巨大な集まりとなつたのでしょうか。

これはビッグ・バン説が宇宙の誕生といった説とは相容れません。ビッグ・バンが存在したなら中心近くに、そのように巨大なエネルギーが残るはずはないでしょう。むしろ、渦巻きの中心がじょうごのようにふくれてブラック・ホールから少しずつエネルギー（重力波）が流出していく。それが次期の子供なり孫宇宙となり生成、誕生する。今回の説のように単体の巨大な質量の天体が、自身の重力で潰れていつてブラック・ホールとして永遠に存在するという考えは極端であり、あり得ない。常識的に物事の本質を捉えていないと思われまます。

しかし、この巨大なブラック・ホールの発見は、宇宙の生成・消滅に関して、恐らく確証を得ることが出来る新たな手掛かりとして、非常に興味をそそるものでした。これで、中心部分から少しずつ流出する重力波のデータが得られれば、新しい宇宙誕生への素晴らしい手掛かりとなるでしょう!!

(一月十八日 口述筆記 千乃裕子)

追記 話は少し逸れますが、『天国の扉』辺りで千乃様が、天上界には美男美女が多くいるというようなことを書かれましたが、それに関して正法参加者の多数がその容貌のゆえをもって、既に天のメンバーたる資格を得ていると勘違いして、目に余る高慢で勝手な振舞いをするものが多く、私達天の者は苦々しく思っておりますが、容貌に関して有利となるのは靈界意識の者のみで、それ以上の高次の次元に上げられるべく、生まれながらの資格を与えられていると解釈するのは大変な間違いです。反って、その容貌が社会の人々に暖かく迎ええられることで、本人の性格をスポイルし、天の意識から遠ざかりやすいものとなることを知らなければ、天の贈り物だと人が言う事柄が反って本人のつまづきとなる。それをよく心して、他の人より自らを戒めなければならぬことを警告いたします。

エル・ランティ

# 第五章

## 天と地の証

はじめに

古くから、神の出現には、人智を越えた現象が伴ってきました。それは、モーセの出エジプト記等で、よく知られております。新約の時代には、復活したキリストが、パリサイ主義のパウロの前に出現し、劇的な改心（パウロの改心）を促した例もあり、奇蹟は、神の声を伝えるにおいて必要不可欠のものであります。現代においても、その神（天上界）が千乃様<sup>せんのかみ</sup>に出現して以来、関係者の周りに、多くの奇蹟が起こっております。ただ、こうした現象は、能力を持ったサタンによつても可能であるため、紛らわしさを避ける目的で、ここ十年以上は、天上界のご方針で行われませんでした。しかし、現在千乃様<sup>せんのかみ</sup>が左翼勢力のため妨害を受けておられるなか、その妨害を軽減させることや、千乃様のまわりの人を、励ますといった目的もあり、天上界のお力で、千乃様の周辺のみにおいて、奇蹟が再び行われたのです。それは、霊能力を備えた人には、映像として出現したり、霊能力を備えていない人にも、自然では考えられない気象現象として現れております。中には、千乃様のお顔から2ミリ角ほどの金粉が、かなりの数出現するのを目の当たりにした人もおります。

これから掲載させていただきます体験談は、その一部でございますが、千乃様が、神々の法の真の後継者であることの証、<sup>シ</sup>理証<sup>シ</sup>文証<sup>シ</sup>現証<sup>シ</sup>——

このなかの<sup>シ</sup>現証<sup>シ</sup>を補足するものとして、紹介させていただきたく思います。

天と地の証

藤 堂 真 澄

一九九四年、何月であったかは定かではありませんが、寒くもなく、かといって汗ばむ程の暑さでもなかった

様に記憶してはいますが、丁度千乃先生が現地付近にいらした頃、先生はどうされておられるのかと思ひ浮かべましたところ、F県と隣の県の二県が明るく光に包まれて黄色く輝いているのが、目の前に映像のような形で見えました。

それを証拠づけるかのように、その映像を見た三、四日後に現地のお手伝いに何人かの正法者と車で出かけたが、その途中耐えられない程の眠気に襲われ、車の運転を続けるのはこれ以上危険だと判断してやむなく近くのパーキング・エリアに車を止めました。着いた途端寝入ってしまった。何時間寝ていたかは分かりませんが、おそらく二、三時間だと思ひますが、やつのことで目を覚まし、又車を走らせたが丁度F県に入った途端に、うそのように眠気がとれ目もはつきりとして気分もすっきりいたしました。

まさに天上界の光の圏内に入った事を思わせる出来事でした。

今までも長距離の車の運転走行中に猛烈な眠気に襲われるという経験はありますが、特にこの時のことは印象深く、記憶も鮮明に残っています。

メッセージの中にありますように、まさしく天上界が千乃先生の元におられるという証ではないでしょうか。

一九九五年、丁度キャラバン隊から帰ってこられたある正法者に千乃先生の近況を色々聞かせていただきました。その後、家に帰ってから千乃先生への攻撃のすさまじさを改めて考えていましたところ、先生のことが心配になりどうされておられるのかと思ひましたら、先生ご自身が車のサイドのスライド式のドアを開けて片手で手すりにつかまりながら外を御覧になっておられるお姿が一つの映像のような形で目に入ってきました。映像ではドアを開けたまま車は走っていましたので、きっと涼をとっておられるのかと思ひました。比較のお元気そうなお姿に少し安堵いたしました。又、狭い車の中ではほとんど楽しみもなく気の紛れる事も少ない生活を強いられて

おられることから、走る車から外の景色を眺められているのは数少ない気を紛らわす方策かとも思い、思わずため息が出てしまいました。

— 何とかこのような過酷な生活から早く普通の生活に戻れないものかと思案を巡らせておりましたところ、今度は千乃先生の乗っておられる車全体の風景が又、映像のように浮かび、更によく見ると先生の車の上から筒状の太い光の柱のようなものが天まで届いているかのように上がっており、ああ先生の元に天と通じている道があって、ここを通って天上界の方々が出入りをしておられるのかと瞬時に思いました。このように思う事自体自分でびっくりいたしました。自分で思いながら、そのように思う自分にはびっくりするという摩訶不思議な世界ですが、あるいは外からのインスピレーションを受けたのかもしれませんが。それとも天上界の方が、千乃先生の元に天上界が結集しておられるという事を比喩的に見せて下さったのでしょうか。その後キャラバン隊に参加した女性から千乃先生の車から立ち上るかなり太い筒状の光の柱を見たという事を人づてに聞きました。私と同じ映像を見た人が他にもいたのです。

— 二人の人間が日も違い、場所も違い、二人の間でのコミュニケーションもない状態で同じ映像を見るといこうとは、紛れもなく千乃先生の元に天上界がおられるという証拠であると思います。

— 一九九六年一月、千乃先生にお誕生日カードをお送りしましたところ、人を介してお礼をいただき、喜んで下さっている事を知り、私も喜んで頂けてとても嬉しく思っておりました。やはり千乃先生のことを思い浮かべましたら、なんと先生の車を中心とした上空のかなり広範囲に光の空間が広がっているのが映像として見え、思わず息をのむ程の衝撃を覚えました。一瞬我を忘れて見入っていましたら、その光の一部がすうっと私まで伸びて届き、その光を受けた瞬間何とも言えない幸福感に満たされて、しばらくは余韻が残り何とも言えない満ち足りた気持ちになりました。

正法という幸せとは、かくあるのだという事を実感いたしました。

今まで色々奇蹟と思える事や現証等りましたが、ここに紹介させていただきました映像の幾つかは私の中で特に印象的であり、今でもはつきりと鮮明に思い出す事ができます。これらの映像について千乃先生にお話いたしましたところ、〃正法者やキャラバン隊のメンバーが誠意と忠誠が報われないと思い、辛ければそれだけ天上界のお励ましが必要です〃とのコメントをいただきました。このように天上界の励ましを受けられた方々に千乃先生からのコメントをお伝えいたします。

## キャラバンと奇蹟

池田和弘

敵の攻撃の中、S波に曝され続けたキャラバン隊の車の状況を改善する為、天上界は多くの奇蹟を御顕しになられている。

例えば、何年か前の夏の夕方のことであつたが、キャラバン隊はある町の方へと向かつていた。途中、隊員のミスがあり、千乃先生の御怒りの発言と共に、前方の町の上空に俄かに黒雲が立ち登り、大雨が降りだした。キャラバン隊はその中へと入るように進んで行ったことを記憶している。

また、先生の乗られている車に故障が発生したので、近くの空き地に運び入れ修理しようとしたその時、私たちの真上で、夜の暗闇の中から突如稲妻が発生し、土砂降りとなったこともあつた。

昨年（一九九五年）、千乃先生の乗られる車を修理している時と同様のことがあつた。早く完成をとの連絡を受けたものの攻撃を受け車の状況は最悪であつた、が突如、大音響と共にカミナリが鳴り、地震が起きた。そして瞬く間に雨。すると、瞬時にして車の状況は改善した。これは私他二名が確認している。

近々では今年の冬、キャラバン隊がみかん畑の細道をお借りし停泊していた日に、フラッシュ状の稲光がごく近くで何回も起こったことがあった。キャラバン隊から数十メートルの所に落雷した程だった。一カ所にこれほど集中する稲光は、自然現象では考えられない。

キャラバンの中で不思議な現象を目にすることもあった。今年（一九九六年）の冬の出来事であるが、キャラバン隊の真上、夜空に、雲でも天の川でもない白い筋が走り、クロスしていた。私他一名で確認した。町の光りも届かず、星のきれいな山中での出来事であっただけに不思議だ。

今も頻繁に起こる奇蹟に、霧の局所的な発生がある。それはキャラバンの状況を改善するように発生する。キャラバン隊から離れた所から徐々に隊へと近づいていくとよく分かるのだが、あくまでもキャラバン隊周辺だけに発生している。流れもなく発生していることもあり、また、隊を中心にクルクルと回転していることもある。突然の事故に際し発生することもある。決してその場の気象現象でない事が分かる。

また、キャラバン隊の近辺に稲妻ともつかぬ光りの筋が音もなく発生していたことも頻繁にあった。天空より地上へ一筋の光りのビームが、定期的に落ちていた。千乃先生にお伺いしたところ、やはり天上界の方がキャラバン隊をお守りする為に出された奇蹟である事を証して下さった。

しかし何よりも印象に強く残ったのは、一九九四年夏、エル・ランティ様が再来される数日前のことである。快晴の昼間であるにも拘らず、キャラバン隊を中心にして五〇〇メートル程の範囲で大雨となった。遠方はグールリと晴れているのが見えた。そして、隊の東にある山には、美しい虹が二重に掛かっていた。後に聞いた話だが、この時日暈も現れていたとのことである。

以上、私たちが頻繁に遭遇する天上界の奇蹟の中で、幾つかを書き起こした。

アリストテレスの『靈魂論』を読んで

北中太郎

先日、近くの図書館で『靈魂論（アリストテレス全集6）』（岩波書店）を手にし興味ある文を見つけました。以下の抜粋はその書籍中にあるアリストテレス（エル・ランティ様本体）とデモクリトス（ウリエル様本体）の靈魂に関する所見です。

- (1) 「ところで有魂のものは無魂のものから二つのことによつて最も多く異なつてゐると思われている、すなわちその二つとは運動と感覚とである。」
- (2) 「デモクリトスは靈魂が一種の火で、そして温かいものであると言つてゐる」
- (3) 「デモクリトスは何故靈魂はこれらのものそれぞれであるかを説明しながら、一層正確に語つた。すなわち、彼によると、靈魂と理性とは同一のものである（それゆゑ最も非物体的）、しかしこの理性は最初の分割できない物体（＝原子）の一つであつて、そして小粒であることとその形態のために動くことのできるものである。そして彼の言うところでは、球形のものが形態（＝原子）のうちでは最も動き易いものである。そして理性も火もこのような球形のものである」
- (4) 「靈魂が身体を動かすのは明らかであるから、それ自身でも動くところのそれらの運動を以て（身体を）動かすのが当然である。しかしもしそうだとすれば、またそれを逆しにして、身体が動くところのその運動を以て靈魂も動くということを言うのは眞実である。しかるに身体は移動によつて動く。従つて靈魂もまたその全体としてなり、あるいは部分によつてなり、位置を変えながら、身体に應じて移動することにならう。しかしもしそ

のことが可能であるなら、靈魂は身体から出ていったとしても、再び入ってくることができるであろう。しかしこのことには、生物のうちの死んでしまったものが蘇生するということが伴ってくるだろう。」

(5)「むしろ反対に靈魂が身体を保持するように思われるからである。その証拠には、靈魂が出ていけば、身体は分散させられ、腐敗するのである。」

デモクリトスは靈魂に対する物理学的なアプローチを、アリストテレスは生物学的なアプローチをしているようです。

デモクリトスの(2)「靈魂が……温かいものである」というのは善靈について示唆しているものと思われる(現在は悪靈も可能)。また、(3)の靈魂が小粒子の集まりであり、球体を形成しているという指摘は、デモクリトスが、靈体を三次元の中に存在する物質として捉えていることを示しています。今世紀、千乃先生を通じて天上界は、靈体の物理学的属性は「小粒子(分子)の集まり」「球体(直径5cm)」であり電磁場のような働きによってエネルギー交換をし形態を保持している存在であることを明かされています。これは、後のキリスト教を初めとする宗教が、靈体を異なった世界に置き人間の世界から大きく引き離れたことと比すと、千乃正法がギリシャ哲学の本流を継ぎ、科学の発達した現代において更にそれを発展させ、天が顕された法であることが確認されます。

(1)のアリストテレスが魂の有無を「運動と感覚」に置いていることは示唆に富んだ驚くべきことです。「運動と感覚」は共に、多細胞生物に於て神経細胞・組織が司る代表的な機能であるからです。例えば、脚気の診断に用いられている膝蓋腱反射は脳を通さず骨髄のみを通して起こる反射機構ですが、まず膝下を叩かれて感覚(神経)細胞が興奮し、その興奮が骨髄を経て運動(神経)細胞へと伝わり、運動細胞は膝蓋腱(筋肉)を収縮させる指令を出します。外界から来た刺激を受け、それに反応する、というのが神経機構の最も基本的な機能です。生物は進化し複雑になるに従って「運動と感覚」の間に多様の情報を処理する機能を持った中枢神経を発達させ

ました。神経細胞や神経組織の存在すらも知られていない時代にアリストテレスが「運動と感覚」を挙げていること自体驚きですが、更にアリストテレスはそれを魂の有無の違いとして挙げているのは、魂が神経細胞・組織と直結していることを表す（現代では）もので、再度驚きです。高橋信次氏が魂は心臓にあるとしましたが、千乃先生は脳にあるとされました。千乃先生を通じてミカエル様は、霊体では、身体機能を果たす要素は失われ、大脳や神経細胞の機能を果たす要素によって霊体が構成されていることを明かされておられます。

(4)でアリストテレスは、霊魂が身体を出入りすること、生物の生と死というものを直結させています。これは92年1月号（背反事件後のもの）で千乃先生と滝川様の質疑応答の中で新たに明らかにされた、天界が人間を幽体離脱させたことは無いということと関連があるように思われます。霊体が判断や記憶といった大脳の本質的な機能を保持し続けていることから、霊体が大脳の成長過程の副産物として生成されたと考えるには無理があるように思えますし、それよりは、霊体は生体にあつては大脳や神経機構の本質を司っている存在で、生体が死を迎えて初めて生体から独立した存在となると考えた方が納得がいくように思えます。

天界は、二千年以上に亘って人類が解き放つこと出来なかつた呪縛を易々と解き放ち、更に発展させて人類に千乃正法としてお示しになられました。百年という単位ですら実感できぬ私達にとつて千年というのは雲を掴むような話ですが、こうして時を越えた事象としてその足跡が眼前に現れると、驚き以上の感動と共に、千乃先生が天界と共におられることへの確信が強まる思いがします。

# 第六章

## 証言集

(『天の奇蹟(中巻)』より)

―『天の奇蹟』上巻掲載 境佐和子様「予告」に続いて―

## 予告(2) 後継者は関西に在り

境 佐和子

〔J1〕一九八〇年三月号掲載

真正の天上界・神はその足跡を、曾てのGLAに残されておりました。

昨年十二月号の「予告」の内容に引き続き高橋信次氏が生前、佳子氏が悟られたと発表される以前の関西本部講演中の天の啓示、追想を重ねた今、次のように申された事を私は思い出しました。

「今、世界を私の宇宙大に拡大された意識の目でみる時、人々の善なる意識の波動・光りのエネルギーは世界の中で、太平洋岸に多く見られます。日本列島には沢山拳がり、その中でもひととき大きな光りの手が拳がっている大阪。私を継ぐ人物が、この地大阪から出るに違いない！ その人は関西の人です。大阪の大きな光りのオーラ、これは未来への正法流布の根源ともなる天のエネルギーを暗示するものです」

「〃その人は女性である〃。そのことのみ私は天より知らされております」  
また、別の日には、

「実は、天に帰る日を間近にしての私が、このように足繁く関西に通い、皆様方の前で講演するのは一つの理由があるのです。

大阪へ来ることが毎回私の楽しみとするところ。それは、ミカエル（大天使長Ⅱ現在のミカエル大王のこと）の姿が、私の関西講演中には必ず会場で見えることです。〃後継者は関西に在り〃という私の信念に変わりはありません」

果たせるかなその人は、 $\times$ 関西に住む人々しかも女性とは、千乃裕子様、ミカエル様の眞の合体者その人だったのです。

エル・ランティ（エホバ、ヤールウエ）様が千乃様七歳の時までお育てになられて、その後はずっとミカエル様の保護の手の中にあつた、その事実には、人類救済の御意志が、天上界の偉大にして聖なるオーケストラが、歴史の長い時を経て、最後の審判の時に顕われている今この時は、いかなる作為によつても打ち消しようもなく、過去にGLAに於いて高橋信次氏により、「天の予告」として証されていたのです。

思えば、ゴッド・ライト・アソシエーション（GLA）の事実上の内容は、一体何処に在ったのでしょうか。その理想は何だったのでしょうか？

文、理、現証の三様を、良識的、科学的に解明される『天国シリーズ』の御著者、ミカエル大王様の御本体なる後継者・千乃裕子様にこそ、曾てのGLAの目的と眞価が、見出されるべきではなかつたでしょうか。

（一九八〇年二月七日）

〔注〕この予告の内容は「」内をまとめて言われたのではなく、種々の講演の断片的なものを境様がまとめて覚えておられたものようです。

（千乃）

## 質疑応答

解答 千乃裕子

〔質問〕天上界上位の方は、過去・現在・未来を見通す力を持つておられる、と聞きましたが、科学的に説明して下さい。量子力学の確率の問題と関係がありますか。つまり或る分子に電子を当てると分子内の電子等のはじけて出て行く方向などを予測できる。そのように天上界の方々は三世を見通せるのでしょうか。

〔解答〕三世を見通す力を、科学的に説明するとなると、これは想像・思考・判断力の働きの説明になりますが、大変良い質問だと思います。

これは反射力学により大脳の働き全般に当てはまる推論とも言えるもので、恐らく、正しい判断、誤った判断が生活習慣、環境適応への努力などから培われるメカニズムを説明する唯一の科学的説明であると思います。

刺戟↓脳細胞内反応↓活動電流↓電子の移動の確率となります。

最近浅井一彦博士の著書を読み、そこに生物体は物理学的に解釈すれば、 $\kappa$ 電気粒の凝集物に過ぎない $\kappa$ とありましたが、大脳生理学で明らかにされた生体の反射力学体系はまさにこれを指すのです。実に興味深いことだと思います。

\* \* \* \* \*

大脳と電流という言葉から、ついでにこのこともまず機関誌に発表しておきたい思います。これは最近悪霊達のスパイ行為が著しく、天上界と私や土田展子さんの用意する公表資料を、すべて先取りして、他の部外者の識者に発表させたり、予測事項を必ず数日後に覆えしたりして、現天上界は予測が外れるか、二番煎じの事柄しか言えないといった印象を与えるような、すり換えのテクニクを用いているような様子があるのです。彼等は悪霊同士数を頼み、ガリレオの $\kappa$ 神なき知育は智慧ある悪魔を作る $\kappa$ を地で行く如く世界規模でそれを行つていくようなので、私達も機密保護法を立案しなければなりません。と言つても、三月号で発表しました通り、霊に對しては殆どその方法が立てられないにも等しいので、(印刷物は編集、校正、印刷の過程で盗み読みされてしまいますから)最近発表年月日を必ず書き添えることにしているのです。これもしかし一冊の本を出版する場合よりも、機関誌の方がオリジナリティと新鮮味においてニュース・ヴァリエーがありますので、天国シリーズ第四巻に先駆けて、重大なことを公表致します。

それはイエス様の十字架上の死に関しての天の實在の証となる、素晴らしい奇跡でもあり、頑迷なクリスチャン

他諸々の天に従わぬ宗教人を顔色なからしめる、その物理化学的解明でもあるのです。

多くの方がマスコミや「聖骸布」という単行本でお読みになり、トリノの聖骸布は十字架から下されたイエス様のお身体をお包みしたまさにその布であることが、『天国の光の下に』で私が他に先駆けて発表した通り、科学者によって証明され、認められたことを御存知であると思います。

その布、リネンにネガフィルムのように写し出されたイエス様のお顔は、あれほどの残酷な扱いにも耐えて、実に安らかで苦痛なきお顔です。この苦痛の跡を留めぬお顔々について、宗教関係者も科学者も、何一つ疑念を抱こうとしないで、これこそ神である証としか考えないという所に、私は宗教に関する非科学性を今更に痛感するのです。

布フィルムからも判る通り、イエス様は真正正銘人間でいられます。人間ではなく神が人形を取られているのだ、等という宗教馬鹿には何を説明しても無駄でしょうけれども。

そして人間であるからには、拷問に等しいやり方であるように無残に傷つけられれば、苦痛に歪んだお顔をしてお顔をし、死なれるのは、医学生であっても知っていますはずで、エジプト第十七王朝のセケネレー王のミイラは、頭と顔を手斧で五、六カ所割られ、苦しみの形相を残しているとのこと。手斧だったからだろう等と馬鹿げた反論は伺いたくありません。

では何故イエス様は苦しまずに死なれたか。天上界元七大天使方は、イエス様が苦痛を感じないよう、お守り申し上げた、と『天国の証』でミカエル様が述べておられます。

その通りなのです。私はその方法を、ミカエル様に詳しくお伺いしました。ミカエル様によれば、頭部から電氣的刺戟（微弱電流）を与え続ける事によって、イエス様は苦痛を殆ど感じられなかった、との事でした。何故感じられないかは、その刺戟によって痛覚が麻痺する効果があることを、ペー・エルデで学んだから、とのお答えでした。

私も同じように心臓発作時の痛みは鈍痛位で、医学書にあるような症状は信じ難いほどです。

それに関連して過日米本明様が、中国の針麻酔で足の裏の土ふまずから微弱電流を流すと、脳幹にモルヒネ様の物質が生じるそうですが、と言われ、天上界は頭頂からなので、多分どちらからでも同じなのでしょう。それがイエス様の苦痛を除去された元大天使方の方法だったのですよ、とお話していました。

そして天上界の頭部からの電気刺戟が針麻酔と同じ効果を齎すことを、脳神経外科で初めて同じ方法を取り、苦痛を除去した報告が七日でしたか（切り抜きに日付を書き込まなかつたので判りません）の『サンケイ』夕刊に載せられ、〃これだ〃と私は心に叫びました。

今や地球人類の科学における進歩は或る方面に関しては、ベー・エルデを上廻るものを示しているとのことです。脳外科医の発見もその一つなのでしよう。

それは次のような記事でした。

『脳卒中後に起こる厄介な痛みを、脳に白金電極を埋め込んで和らげるといふ日本最初の手術が、東京女子医大脳神経センター（所長、喜多村孝一教授）で、成功……手術を手掛けたのは同センター天野恵市助教授をキャップとする河村弘庸講師、谷川達也助手ら八人の「痛みグループ」……退院後、三カ月目ぐらいから少しでも触れられると体中に痛みが広がるようになった……特に体の左側がひどいため寝るときも右側を下にしたまま、寝返りもできないほどだった。

この激しい痛みは脳の視床近くに出血した場合の後遺症で「視床症候群」と呼ばれる。従来は、治療法がないといわれていた。

しかし数年前に脳に存在するエンドルフィンという物質がモルヒネと同じような鎮痛作用を示すことがわかり、これをきっかけに米国で、中脳を中心灰白質という部分に電極を埋め、体外から電気刺戟を与えて、エンドルフィンの放出を促進、痛みを抑える治療法が開発され既に七例成功している。

一方、天野助教教授らのグループも、中心灰白質のすぐそばに、一時的な電気刺激を与え、痛みを除く方法を独自に考案、二十人の患者に応用、成果を上げてきた。そして、この方法でも脊髄中のエンドルフィンの量が治療前の二倍に増えることを確認している』

これで納得しないで、ミカエル様は偽者というキリスト教関係者及び他の宗教関係者が居るとすれば、その人達こそ悪霊に操られ、その住む家、及び教団は悪霊及び死霊及び浮遊霊の住み家となっているのです。

現天上界より高次の他の天上界ありと希望的思考を巡らす人は、私ならびに現天上界がかくも大胆に且つ自由に驚くべき事柄を天の事実として披瀝出来るはずがない。個々の霊の行動に統制なき天は実在するはずがない。従って現天上界以外に高次の天上界が若し存在するとすれば、必ずこの自由な発表に対し何らかの制裁があるはずである。しかしその制裁はなく、天上界及び私は魂の自由な飛躍の中に次々と大担に他の追隨し得ない真理を発表し、謎を説き明かしている。即ち、現天上界以外に高次の天上界はない。この単純な三段論法的結論を導き出せない人は、大脳が既に動脈硬化症状を呈しているか、自己保存（何らかの利益の為に自らの主張や考えを事実を目を閉ざして固持する）のどちらかに低迷しているのでしょうか。

（一九八〇年四月十日）

イエス様は何故苦痛なく昇天なされたか

「ハリ」と「ホルモン」から推理する

高野信義

電気針（12V 200 $\mu$ Aの直流を数秒間、穿刺針を通して通電する）で人体のある部位を電気刺激したハリで穿刺すると鎮痛効果があらわれる事から、脳手術や抜歯等で麻酔として使用されているが、その作用機序は医学的に

解明されていない。そこで、東洋医学の「ハリ」と西洋医学の「ホルモン」を鍵として謎ときをしてみたい。気楽な気持ちで読んで頂ければ幸いである。

#### ◇第一のカギ（経絡と経穴）

東洋医学では人間の生命とは六臓（肝・心・脾・肺・腎・心包）と六腑（胆・小腸・胃・大腸・膀胱・三焦）で調整され、そのなかの一つでも故障が起こると全体の調子が狂う。これらにエネルギーを与える循環系が人体に流れていて、これを経絡と名づけ、それぞれの循環系に調整される臓腑の名をつけたのが十二経絡系である。

又、経絡には電気が流れやすい点が一定の形に並んでいて自律神経の興奮している場所であることがわかり、この点を経穴（ツボ）と呼んでいる。つまり経絡は自律神経の興奮点を結ぶ一連の系統というわけである。又、三六五個あるという経穴の中でも百会（左右の両耳を結んだ線と眉間をまっすぐうしろにいく線の交点）は頭のてっぺんにあり、体の中のすべての経絡が合流しすべての病気にきくツボとされ、百会の前三センチの所を前頂、後三センチの所を後頂というツボがあり、これらのツボを使用すると痛みがとまるという鎮痛作用がある。即ち頭頂葉全域が「痛み」に関係し、その中心が百会というツボであるという事である。

#### ◇第二のカギ（ホルモン）

ホルモンとは「刺激する」というギリシャ語で、体内に微量分泌され、作用を受ける臓器の細胞を刺激し活動させる物質である。頭蓋骨底部のトルコ鞍という場所にある大豆大（○・五グラム）の脳下垂体が、人体のすべてのホルモンを支配している。又、脳下垂体前葉は、視床下部とつながっており、この視床下部に自律神経の中枢がある。

◇第三のカギ（内因性阿片物質）

昭和五十年、スコットランドのマリシャル・カレッジの麻薬研究班は、ブタの脳エキスから、麻薬であるモルヒネと同物質を発見しエンケファリン（脳内因子）と名づけた。このようなものはその後三つ発見され、内因性（脳内で自ら作れる）阿片物質と名づけた。

昭和五十一年にエンケファリンは脳下垂体前葉ホルモンの一つであることがわかり、この分解産物が、 $\alpha$ -エンドルフィン、 $\beta$ -エンドルフィン、 $\gamma$ -エンドルフィンである（エンドルフィンとは内因性モルヒネという意味）。昭和五十四年、京大の高木教授がウシの脳からチロシン—アルギニンというアミノ酸二個のペプチドを分離し、これがエンケファリンのような内因性阿片物質を遊離し、効くのではないかとのべている。

エンケファリンは視床下部、大脳辺縁系、大脳基底核に、脳幹網様体の中では中脳の、中心灰白質に高濃度に含まれ、エンドルフィンには脳内に少なく脳下垂体に多く含まれている。

以上三つのカギをヒントとして、ツボの刺激により自律神経を刺激し、中枢のある視床下部よりホルモン分泌が促され、脳下垂体前葉、又視床下部、大脳辺縁系、大脳基底核、中脳中心灰白質が刺激され、内因性阿片物質を放出し鎮痛効果を与えるものと思われる。

そこで『J-I』五十五年五月号でミカエル大王のいわれる、 $\gamma$ 頭部（頭頂葉）から電気的刺激を与え続ける事によって（内因性阿片物質が放出され）イエス様は苦痛を殆ど感じられなかった。その刺激によって痛覚が麻痺する効果があることをベー・エ

内因性阿片物質	β-エンドルフィン	α-エンドルフィン	γ-エンドルフィン	鎮痛作用	作用時間
エンケファリン	61-65	61-76	61-91	+	5分
α-エンドルフィン	61-76	61-91	61-77	++	30分
β-エンドルフィン	61-91	61-77		+++	4時間
γ-エンドルフィン	61-77			-	

ルデで学んだから……ッより、以上三つのカギによる皆様の推理により、ミカエル大王のいわれることと矛盾した所があったでしようか？

（書き終って）

地球での医学は進歩はしている。しかしやつと糸口がつかめたという時に、既にペー・エルデで学んでおられたというこの事実、私は何と表現したらよいのだろうか。天上界の叡智に畏敬の念を払うと共に、天上界の書によつて学ばされる所は無限にあることに改めて感謝すると共に、ヒントを与え又御指導して下さい下さった千乃先生（ミカエル大王本体）と天上界に感謝いたします。

〔参考文献〕

大木幸介「脳をあやつる分子言語」講談社

中谷義雄「爽快ツボ刺激法」講談社

芹沢勝助「人体ツボの研究」ゴマ書房

久保田康耶・他「歯科麻醉学」医歯薬出版

「ペインクリニックに於ける電気針の効果」広島麻酔学会

藤原知「針灸医学の基礎概念としての経穴、経路」

その他

☆  
☆  
☆  
☆  
☆  
天上告知版

（その一）事もあろうに「トリノの聖衣」をニセ物と発表したイタリヤの人類学の教授がおります。酔いの目を覚ませ、天上界の存在を再確認する反論を『希望』十一月号に書きました。聖衣は100%の本物で、慌て者の教授の論文は重大な論点を見落としております。

(その二) 英日曜紙『オブザーバー』、九月二十日付に、男装し、男性に興味を示さなかつたジャンヌ・ダルクは女性化した男性か、という奇異な記事が米生物学者ブラット氏により寄せられたとのこと。ミカエル様は、少女の声で語り、それ以外には疑ったこともないと申されます。ジャンヌはダビデに殺されましたが屈辱的な疑問です。

天の使命を第一と信じ、独身で通す決意で故意に男性に興味を示さない、純粋な乙女心というのも心理的にはあり得ます。この興味本位な生物学者には判らないでしょうが。

(九月二十九日 千乃)

〔附記〕『J』誌八一年十二月号及び新書判エルバラム(天使の群)に高野信義先生(歯科医師)が「ジャンヌ・ダルクは果たして女性化した男性か?」という、天上来を証明する、正しい反論を書いて下さいました。是非お読み下さいませ。本誌にはスペースがなく載せられませんでしたので。

(千乃)

## トリノの聖骸布への疑いと反証

千乃裕子

ジャンヌ・ダルク男性説に続いて第二の愚説——十三世紀や十四世紀に画家がリネンの上に描いた像だとか、イタリアの人類学者ピトリオ・デルフィノ教授(バリ大学)によれば、石膏の像の上に布をかぶせて、その布を撰氏二一〇〇〜二二〇〇度で三十秒間あぶれば、百枚でも二百枚でも出来ると、これは全く非科学的な説を本にし、五十六年末に発刊したとのこと。教授という地位があれば、如何に拙劣な説でも世間は注目するものだと感心致しました。〔希望と愛と光〕一九八一年十一月号参照

ヘモグロビンの反応を示す血液の跡、その流れの方向、ムチ打ちの跡、ユダヤ人の容貌と三十歳代の身体、各所の聖書記述通りの、数まで一致する傷跡、槍と釘の跡、まぶたの上に置かれたコインの大きさと形の跡、当時のパレスチナで生えたとされる不毛地帯植物の花粉と(死海やネゲブ周辺の典型的な植物)布があちこちに運ば

れ、隠されていたとされる歴史通りの場所や国の植物の花粉。あらゆる可能な、そして厳密な物理化学的測定と調査（炭素14法による年代測定を除く）研究に基づき行われたNASA科学者チームによる発表ですが（『UFOと宇宙』八十二年新年号参照——参加学者名不明、一九八〇年十月、四十名の科学者が五昼夜にわたってテストを行なう、とある）デルフィン氏説に関するサンケイ記事（一九八一年九月二十八日朝刊）に同時に記述されておりましたが、米国物理学者、ケネス・スチーブンソン、ゲアリー・ハバマス両氏及び、四十人の学者が聖骸布を鑑定、本物と断定を下した同じ説の新資料でしょう。両氏は布の写像が自然現象では説明出来ない熱あるいは光の照射で生まれた物としながら、『UFO』誌のNASAチームは、顔のりんかくなどの立体像がどのようにして克明に布に写し出されたかは謎としております。密着していただけでは証明出来ない立体的なものとのこと。

しかし布に描かれた画像でも十四世紀に偽造した物でもあり得ない、あまりに多くの証拠が分析によって発見されたことは当然すぎるほど当然です。中世の科学技術にも知識にも、キリストが十字架の上で苦痛を和らげる為にしばしば伸び上がり、それによって生じた血液の流れの角度、脇腹を槍で刺された時にほとばしり出た血の流れの跡——そういった物を偽造する術は皆無。現代でも、これだけ多くの事実を裏付ける為に聖骸布をそのまま偽造することは、実物がなければ不可能なのです。それを結論づけられない学者は石頭でしかありません。

（八二年三月）

## 十字架上の死及び復活を示す聖骸布々々 実験に先がけてのヒントと解答

千乃裕子

実はこれについては、第四卷『天の奇蹟』下巻発刊まで発表しないと心に決め、『J1』誌にもそう断言しておりましたが、NASAでは（前述の科学チーム）来年辺りにトリノの教会が炭素14法テストに合意するだろうと

言つておりますし、こちらはまだ中巻も製本に掛つておらず、下巻が出るのは一寸時期が判りませんので、方針を変えることに致しました。セルメスシリーズ第三巻『エルバラム（天使の群）』にも同様に発表致します。

真偽論争が現在の実験方法で果たして正しい解答を得、終止符が打たれるかどうか疑問を生じたこともあり、一方こちらに先んじて万一直しい証明が得られた場合、私達の出る幕がなくなりません。つまり、真実を知る天上界高次元の方々が自ずからを証明する場を一つ失い、私にとつてはこれは耐え難いことです。偽メシヤ、宗教宗派及び非良心的なマスコミが勝ち誇る機会を虎視眈々と待ち構えているからです。

さて、前掲のUFO誌八十二年新年号によりますと、四十名の科学者がテストを行ない、どうしても謎として説明を待つ事柄に、

一、いったいどのようにしてその像はリンネルに付着して、完全に立体的な像を形成したのか

二、このリンネルに、どのようにして奇蹟的な立体像が現われたのか  
の二点があります。

彼等もし布が人間の顔に直接に押しつけられたら、できる像は歪んだものになる。そして一つの実験をやつてみて、一人の男の顔に油を塗り、その上に布をかぶせ、その布を焦がして像を得たが、随分歪んでいた。その理由は立体的な物体を二次元の物に投影したからで、結局一、二の論点は謎のままであると書いております。

又、像が押し花のように紙の間にはさまれて押しつけられた葉のように見える。そして実際に押し花は、本の八ページを通してしみを残しており、それは押し花が紙のセルロース繊維によつて吸収される自然の化学作用、というよりも酸化作用によつてしみが生じている状態だ。その場合、歪んだ像でなく、正しい像が付くはず、だから写像は自然の経過によつて起こつたに相違ないと推論するチーフ・カメラマンも居ります。

しかし、彼等がケネス・スチーブンソン氏とゲアリー・ハバマスの両氏と共に働き、両氏の結論を知つての上で語っているかどうか疑問が湧きます。何故なら、スチーブンソン氏とハバマス氏の結論がずばりその解答で

あるからです。

私は御存知の通り、物理学者でも何でもなく、正法活動と機関誌編集他で、全くの忙しい日を過ごしており、実験器具もなければ設備もなく、専門的な化学実験の方法も知りません。そして正法者の中の専門家にこの実験を依頼し、今年中にそれが可能であれば天の言われる条件を満たし、証明する実験結果を得たいと望んでいる段階です。

ミカエル様の言われる実際に起こったこと——イエス様が安息日に埋葬が禁じられているので、金曜日の午後三時頃息を引き取られてから三時間位して十字架から下ろされ、その後一時間ほど掛けてようやくその近くの新しい墓に仮安置され、型通りに亜麻布で全身をおおい、布ひもで数箇所をゆるくくくり、腹部と布の間に没薬もつやくと沈香の入ったつばを置いて、塗油もせず(\*)、埋葬の儀式もそこそこに、弟子達や母マリア及び弟妹達が帰宅し、安息日の始まりにようやく間に合ったということが、『聖骸布にもとづく十字架の道行』モンシニョール・ジュリオ・リッチ著、『聖骸布』ガエタノ・コンブリ著、ドンボスコ社及び新約聖書の四福音書、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ伝にかなり詳しく書かれております。

(\*) アロエ、没薬、沈香他香料が、塗られたと聖書にあるが、塗るひまはなかった。だから血痕がそのまま残されている。流された血の跡もそのまま。それがイエス様御自身を証明した。(編者)

しかしイエス様が墓に安置されて安息日の次の日、日曜の明け方に、マグダラのマリアがイエス様の復活を知る迄に大きな石で戸のようにふたをされた岩の墓の中で何が行なわれたかを語れるのはイエス様の復活を可能ならしめた当の天使方(現在のミカエル大王様他の元大天使方や天使方)以外にはないことを読者の皆様も納得なさるでしょう。

ミカエル様は言われます。十字架上の死を苦痛少なくする為、頭頂部から間断なく電気的刺戟を与え続けた後、息を引き取られて一時間、死後硬直が始まる寸前迄、あまりの凄惨な死を実現させたショックと悲しみに只、ほ

んやりと見ておられた。イエス様の魂は身体を離れず、そこには人々のすすり泣きと号泣の声と真二つに裂けた神殿の幕屋を見て恐れた兵士や見物人を支配した不思議な静寂が、ミカエル様達にも次に為すべき事を忘れさせた。

そして我に帰り、イエス様の魂が身体を離れないように、永久の死が肉体に訪れるのを防ぐ為にあらゆる意志の力を働かせて、四方八方から天使達、大天使達、総勢二十人位で光でもあり熱でもあるエネルギーを与え始め三十七時間余（聖骸布に包まれてから三十四時間余り）そして復活されてから二時間余り、続けたと言われます。イエス様を心の底から敬愛しておられて、その死をサタン・ダビデの残虐非道な仕打ちで迎えたミカエル様の胸中は誰に説明しても理解してもらえない、はり裂ける思いに満たされていたと言われます。イエス様を間接的にしか知らないキリスト教徒があれば慕い、十字架の死を悲しむのですから、ミカエル様の悲しみは、他の誰よりも深く、傷つき、心の血を流し続けられた物であつたでしょう。

そして天を仲介する者のこのような死は二度と来たらせまいと固く決意されたのです。それは不幸にもサタン・ダビデの飽くなき悪の野心と謀略で、くつがえされてはきましたが――。

即ちこの与え続けられた電磁エネルギーが（カロリー値は後に実験で割り出されます）筋肉賦活に役立ち、細胞を枯死させずに済ませるのにその役割りを果たしました。

墓に横たえられて二時間ほどして、イエス様の魂は抜け出てしまわれ、死体は筋肉細胞だけが生かされている状態になったとのことです。そして三十四時間、日曜日の明け方五時にイエス様の魂に身体に戻る言われ、イエス様は聖骸布を出られ\*墓の隅に隠れて立つておられた。そこにマグダラのマリアが友人と現われ、その時大天使方は封印を切り、石の戸を転がされた。マリアに話しかけられたイエス様は霊体でした。再び抜け出られて――。御身体は天使方が支えました。

(\*)一説に、布をたたむとあるが、復活の状態では立ち上がり、歩く以外の動作は不可能、と天上界の証言あ

り。(編者)

そしてマリアが再び勇んで弟子達の所に報告に行つた後、復活の証として、イエス様の御身体を、魂が入られ、動かす奇蹟が行なわれたのです。体温を保ち、筋肉が硬直しない為と与え続けられたエネルギーが細胞を死なせず、容易に動かし得たのです。それは生理学の実験でも可能であることを、小動物の実験から専門家でなくとも納得しうると思います。

何度も立ち止まりつつ人目を避けた道を二時間後にイエス様の身体が、ようやく行き着ける場所、ベルス河岸に着く迄動かされ、歩かされて、そして水中に沈められました。その日の夕方以後弟子達に会われたイエス様はすべて霊のお身体——魂であつたのです。

奇蹟その物は経過だけでは大した事には見えなくても、ここに聖骸布に写し出された立体像の秘密の謎解きのヒントがあり、解答があるのです。

聖骸布が、ゆるくおつた状態で、全面に密着していなかったから余計に鮮明に映像が写し出され、それが写真のような平板なものではなく、レントゲン写真のように立体的にイエス様を前面、背面の細部にわたつて写し出し、しかも強い放射線ではなく、普通の辺りに存在する電磁エネルギーで行なわれたがゆえに、布と肉体との距離に忠実にネガフィルムを布上に作り出し、レントゲンフィルムのように骨のみを写し出すことはなかったのです。広島島の爆心地近く、とある銀行の石段に腰掛けていた人物の影が丸味もそのままに、くつきりと焼きつけられていた——放射線も含めて電磁エネルギーはそのような作用もするものです。しかし勿論これは重ね合わされた部分は写し得ず、布に面した部分のみを写し出すのは電子のメカニズムからみて当然のことでしょう。只レンズを通したのではないので実物大の写像、立体像が現われたのです。

トリノの聖骸布のみがネガの役目を果たし、他の聖骸布は一枚もその形で残されてはいないはず。何故なら、イエス様のみがそのように長時間布を通して電気エネルギーを与えられたからであり、又、写像はスチーブンソ

ン氏とハバマス氏の説の通り、自然現象では起こり得ず、熱あるいは光の照射によって生まれたからなのです。たとえ全面的に密着していても、押し花のように上下から重石がなければ、平面的な歪みの像であっても似た物は出せません。

そして聖骸布にイエス様の立体像を写し出す為は何らかの工夫かなされたわけではなく人によって偉大々という表現をしようと、々何んだ、簡単々々と表現しようと、それはキイエス・キリストの復活を実現する過程での副産物々であったのです。しかも死海周辺地域の強い電磁波の偏在するパレスチナでこそ可能であったのでしよう。(『天国の光の下に』二八四頁及び『エルフォイド(天使の冠)』一五六頁参照)

これらのことは専門的な数字、計算を用いて、改めて聖骸布実験の報告書として、正法者の専門家の方々に提出して頂き、『J』誌、第四巻(下)などに発表しようと思っております。

(一九八二年一月二十四日)

(注)

☆ ついでながら、サンケイ一月下旬某日紙によると英国で最近、キリスト生存説の資料を十年掛けて集め、結論論付けて、「聖なる血統の探究」という本をヘンリー・カーンら三人が共同執筆で出し、またそれがベストセラーとなつているとのこと。残念な事に、イエス様には四名の弟様が居られたと伺っております。似た顔だちの方も居られるはず。あるいはキリスト復活の証明の為の偽系図の偽者。

サタン・ダビデがイエス様を生かしておくような人物だと思いませんか？ 最も残酷な方法で死に至らしめ、天を悲しませるのが目的でエル・ランティ様にあのドラマをその昔提案したのですよ。々最も人を感動させる、人類を救う近道々としてね。あのような形の死——十字架刑の最も凄惨な形を、天は決して望まれなかったのです。少しずつダビデが人を介して予告させた刑死の方法が、あのような物であるとは、エル・ランティ様は想像

なざりたくなかったのでしょうか。天の王のお仕事の忙しさに取り紛れて——七大天使のみがそれを悟り、何とかエル・ランティ様に進言を試みておられましたが、巧妙にもいつもダビデが側に居り、それを歪めてごま化してしまつたのです。そして何よりも巧妙にエル・ソラッティヤ王に取り入り、ソラッティヤ王がダビデへの正しい理解を阻みました。(『天上界メッセージ集・Ⅲ』エル・カントルーネ王家の系図参照)

偽メシヤを信じたがる人も多いのですから、ク一笑に付すべきでないクと言つたナンセンスな英国の著名な小説家も、貴族が末裔というこのお話に好感を持つた、いかにも英国人らしい意見です。天上界ではク一笑に付されましたク。因みに、掲載紙の日曜紙オブザーバーというのは、サンケイ仲介の記事からはこういった興味本位の低俗な内容ばかり。呆れた物ですね。そういった物も載せないと売れないのは判っておりますが。

☆ 偽メシヤと言えば、霊友会の天玉尊女史もですが、マイトレイヤー如くなる人物(どうやら『光の下に』で御紹介しました、現天上界が全然御存知ないク中近東クの救世主と関連がありそうですが?)を大々的に救世主としてテレビ放映専門で紹介している英国人も居り、ユリ・ゲラーと同じ原理のク奇蹟ク現象(?)なのでしようが、英国人が一番重症のメシヤ病なのですね。(四月二十四日 千乃)

聖書に現れるク消滅クとク合体クとは

千乃裕子

―天国シリーズ第一―第三巻にしばしば現れるク消滅クはク第二の死クと聖書で表現―

それから、死も黄泉も

火の池に投げ込まれた。

この火の池が第二の死である。

このいのちの書に名がしるされてない者は

みな、火の池に投げ込まれた。

(ヨハネ黙示録第二〇章一四節)

しかし、おくびような者、信じない者、  
忌むべき者、

人殺し、姦淫を行う者、まじないをする者、  
偶像を拝む者、すべて偽りを言う者は、

火と硫黄の燃えている池が、

彼らの受くべき報いである。

これが第二の死である。

(ヨハネ黙示録第二二章八節)

Ⅱ第四卷(上)第三章にも記載されている

ク合体は次のように表現されています——

・同じようにして霊もその魂に会いに来て言った。

『……わたしは地上にいて、きみの中に住んでいたとき、きみの中に元氣を取りもどす場所を見出すことができたからだ』

・霊も同じように言った。『わたしは……あなたの判断に従ってそれの中に住んでいたとき、そこで元氣を取りもどす場所を見出していたからです』

(新約聖書外典パウロの黙示録第一四章より)

(死者の魂を天使が神とミカエルや他の天使の群れの居る場所へ連れていき、その天使が魂と神に向かって言った言葉——合体を証明するもの)



## 天国の扉 千乃裕子著 1236円

ミカエル大天使の真相を明かす衝撃の書。再臨の救い主達（七大天使、モーセ、ブツカ、イエス）による最初の正式な証言集。著者の霊体験、ペーエルデ星の衛星群、天国……空高き善霊の住みか、正法一補足および用語解説を加え、神・靈魂・天国の实在を立証。



## 天国の証 千乃裕子編著 1240円

再臨の救い主達による第2回目の証言集。人類の救いに至る「最後の審判」に対してミカエル他天使達、エホバのメッセージ。悲しい結末となった高橋信次氏の失脚、天使の詩集等を掲載。正法の歴史をふまえ進化論に基づき宗教と自然科学の一致を論証。



## 天国の光の下に 千乃裕子編 1339円

天国シリーズ第1作、第2作に喚起された人達の宗教遍歴。憑体験、奇蹟の体験寄稿集。編者による霊能、霊界の科学的分析、歴史に顕われる七大天使、GLA高橋信次理論の誤り並びに修正点、アトランティス大陸の実証などを網羅。



## 天の奇蹟(上) 岩間文彌著 千乃裕子編著 1030円

天地創造の由来、エデンの園の場所は、ノアは实在の人物か？を自然科学に基づき解明。ラファエル大天使が奇蹟の原理と天の目的を証言。天上界への質問と解答（ラファエル）。UFOと奇蹟の虹カラー写真を掲載。



## 天の奇蹟(中) 岩間文彌著 千乃裕子編著 1236円

自然科学に源流を求めて、ヘブライの民族の故郷ハランを旅立つアブラハムは实在の人物か？モーセの荒野放浪、種々の奇蹟、死の謎を天の示唆を得て初めて解く。イエスは何故苦痛なく昇天されたかを論述しトリノの聖骸布の真実を発表。天上界への質問と解答（ミカエル）。



## 天の奇蹟(下) 岩間文彌著 千乃裕子編著 1550円

イエス・キリストの生誕と天の奇蹟の真意を余すところなく解明——従来の聖書観にピリオドを打ち、新約聖書成立の背景からハルマゲドンに至る天の足跡を驚くべき真実をもって証する。奇蹟について——聖ペルナデッタ他奇蹟の原因等、天上界への質問と解答（ガブリエル）



## 天使の詩 セルメス

700円

人類が求め続けてきたユートピアへ！人類滅亡の危機の時代に今どう生きるべきか？天上より3次元の人々へ警鐘。愛について、医学を考える、科学のあり方、理想の社会他、悩めるものへ希望と愛と光をもたらす内容を掲載。



## 天使の冠 エルフォイド

803円

天の善しとされる正しさとは？勇氣とは？価値のない宗教、永き苦しみを経て神を観た人々の手記、アポロの時代、ギリシャに至る正法の流れ、思念の波動及び霊能の分析、天上のしるしとサタンのしるし他。現正法理論について詳述。



## 天使の群 エルバーラム

正810円・続906円

高次元の天上界が今はじめて明かす真実の数々。天の現象と霊体の構成。誤った社会観。理性とは、正法を学ぶ人々のために他。イエス・キリストの復活とトリノの聖骸布について。大川隆法への反論集他多数の内容を掲載。真理と希望のメッセージ集！



## 天使の智慧 エルロイ

910円

21世紀へ向けてのエネルギー問題。自然健康法。電磁波放射線と自然治癒力と蘇生力との関連、電磁波エネルギーの刺激による神経興奮伝導と筋収縮の機構他の、多方面から聖骸布々実験の成果を論証。法と人類と進化。UFO、宇宙人の正体は？等と高次元からのメッセージ。



## 天使の角笛 エルカロム

906円

旧約聖書に印された天の足跡、天上界と古代日本、古代イスラエルと日本神道、日本語の祖語。食律、食生活について。そして心の分子レベルでの物理、化学的分析を発表。霊体になるとどうなるか？他多数の充実した内容。人類のために今、天は時の流れを変える角笛を鳴らす。



## 神の怒りと悲しみ 歩紀由衣著 980円

未知の地球史を公表し、魂の構造、神の存在を論証する、現在行なわれている「最後の審判」の真実を明らかにし、宗教と科学、人間の生と死、そしてその向かうべき未来について探究する書。



## 古代日本と七大天使 西澤徹彦著 千乃裕子監 2580円

古代日本歌謡、和歌は神ヤハウエのヘブライ語による霊示を隠蔽したものであることを発見。天を司る七大天使をはじめ神ヤハウエ、イエス・キリスト、モーセ、ブッタの名を明らかにし、日本の存在すべき意味を論証。

人知事や天使の言葉に  
めざすこと  
天上界  
メッセージ集

## 天上界メッセージ集

1240円

千乃裕子/JI編集部編 (A5判)

21世紀に至る人の真の望みは何であろうか？

「最後の審判」という大なる法の裁き続行の下で現天上界が語る数々のメッセージ。美しい地球を死の星とするか、未来へ続く希望の星とするか、今、読者に本書をもって問う！

人知事や天使の言葉に  
めざすこと  
天上界  
メッセージ集・続

## 天上界メッセージ集・続

1240円

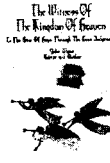
千乃裕子/JI編集部編 (A5判)

『天上界メッセージ集』に続き天上語によるメッセージ、天使の詩を含めて珠玉のメッセージを一挙収録！「最後の審判」を迎えている今、21世紀へ生きぬくための智と義を求め、愛について考える賢き人々のために本書を贈る。



### THE DOOR TO HEAVEN

(天国の扉)  
定価 2833円



### THE WITNESS OF THE KINGDOM OF HEAVEN

(天国の証)  
定価 3378円



### UNDER THE LIGHT OF HEAVEN

(天国の光の下に)  
定価 3378円/  
ペーパーバック定価 1803円



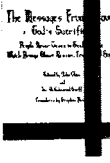
### 天国の門

(韓国語版  
『天国の扉』)  
定価 1236円



### SERMES (セルメス)

定価 1803円  
ペーパーバック



### THE MESSAGES FROM HEAVEN

(天上界メッセージ集)  
定価 2369円



### 天国の扉

(中国語版  
『天国の扉』)  
定価 1236円



### 天国の見證

(中国語版  
『天国の証』)  
定価 1236円



## 月刊 JI 400円/年4000円

科学時代に生きる私達が迷いから目覚めるために正法 (= 大宇宙・大自然の法則、正しい律法)をとらえ、科学、医学、心理学、政治、文化、芸術などおおよそ人間のかかわる全ての分野を研究する月刊誌です。天上より与えられた愛・正義・信義を三つの支柱にして地上のユートピアをめざします。「天上界からメッセージ」千乃先生の「雑ノート」を掲載。

— 絶賛発売中！ —

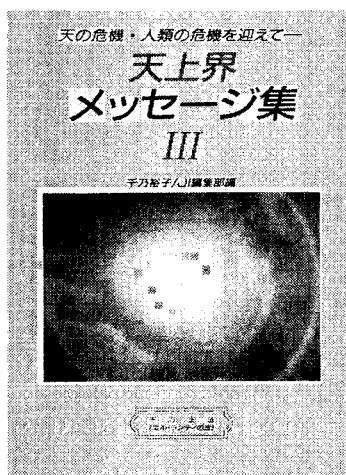
天の危機、人類の危機を迎えて—

# 天上界メッセージ集・III

千乃裕子／J I 編集部編

悪霊集団による天の神々の暗殺、科学兵器を  
駆使し執拗に著者に襲いかかる左翼ゲリラの  
魔の手、天と地の存亡を賭けた闘いの足跡と  
衝撃の事実が今ここに明かされる。

定価1800円（本体1748円）



# 現象テープ・リスト

天上界の眞の現象は、下記のテープのみです。  
現正法をよりよく理解する為には是非お求め下さい。

No.1 ~No.3 欠番	No.27 正法流布について(ガブリエル様) 質疑応答 S.55.8.11 現象 土田展子
No.4 正法基礎講座「ミカエル様の法話」 S.52.6.23 現象 土田展子	No.28 自己犠牲について(ミカエル様) S.55.9.14 現象 土田展子
No.5 正法基礎講座「明るい心、暗い心」 S.52.7.18 講師 千乃裕子	No.29 イエス様クリスマスメッセージ「愛と信仰」 S.55.12.21 現象 土田展子
No.6 正法基礎講座「高校生クラス」 S.52.8.1 講師 米本 明	No.30 啓蒙運動としての現正法 S.56.4.12 講師 岩間文彌
No.7 正法講座「『天国の扉』出版お祝いの言葉と共に」(ミカエル様・イエス様) S.52.12.1 現象 土田展子	No.31 天上界と質疑応答(ガブリエル様) S.56.9.10 現象 土田展子
No.8 正法講座(イエス様・ミカエル様) S.52.12.14 現象 土田展子	No.32 物の考え方について(ラファエル様) S.56.9.15 現象 土田展子
No.9 正法改正理論 S.53.3.21 解説 千乃裕子	No.33 慈悲について(ガブリエル様) S.56.9.13 現象 土田展子
No.10 正法を学ぶ人のためにI「後継者について」 (ミカエル様) S.53.7.10 現象 千乃裕子 土田展子	No.34 霊について(ミカエル様) 霊能と天上界高次元の霊について(ラファエル様) S.56.10.18 現象 千乃裕子 土田展子
No.11 正法を学ぶ人のためにII(ミカエル様・イエス様) S.53.10.16 現象 千乃裕子	No.35 クリスマス・メッセージ(イエス様 ラファエル様 ガブリエル様 ミカエル様) S.56.12.20 現象 土田展子 谷田三枝 金鐘漢
No.12 正法を学ぶ人のためにIII(ミカエル様) S.54.2.1 現象 千乃裕子 メッセージ(ブッタ様) S.53.10.1 現象 土田展子	No.36 消滅について(ガブリエル様) S.56.12.27 現象 土田展子
No.13 心の働き S.54.3.17 講師 岩間文彌	No.37 イエス様 ウリエル様 サリエル様 パヌエル様 ラグエル様 メッセージ S.57.1.10 現象 土田展子 谷田三枝
No.14 正法の歩みーギリシャ時代 S.54.6.3 講師 岩間文彌	No.38 ユートピアについて(ウリエル様) ガブリエル様 メッセージ S.57.1.17 現象 土田展子 谷田三枝
No.15 身体と霊体の成り立ち S.54.9.2 講師 岩間文彌	No.39 進化の歩みをたどりて S.58.7.10 講師 岩間文彌
No.16 ミカエル様メッセージウリエル様正法講座 S.54.11.4 現象 土田展子	No.40 ガブリエル様 イエス様 メッセージ S.58.7.10 現象 谷田三枝
No.17 イエス様 クリスマス・メッセージ S.54.12.23 現象 土田展子	No.41~No.44 欠番
No.18 「魂の研磨」について(ガブリエル様) S.55.2.10 現象 土田展子	No.45 天の奇蹟・下巻 発刊によせて (ラファエル様) S.62.7.5 現象 金鐘漢 千乃裕子
No.19 「宗教と人間の関係」(ガブリエル様) S.55.3.9 現象 土田展子	No.46 「天の奇蹟」完結にあたって 「天上界と古代日本」 S.62.7.5 講師 岩間文彌 西澤敬彦
No.20 再び愛について(ミカエル様) S.55.4.6 現象 土田展子	☆目の不自由な方に声の圖書を/ (心に語りかける朗読です。) 天国シリーズ①「天国の扉」全6巻 7,000円 ②「天国の証」全6巻 7,000円 ③「天国の光の下」 に全9巻 7,000円(各巻送料共) セルメスシリーズ①天使の詩(セルメス) ②エルフォイド(天使の冠) ③天使の群(エル パーラム) ④続天使の群(続エルパーラム) ⑤エルロイ(天使の智慧)ー各巻5,000円
No.21 原罪とは(ラファエル様) S.55.4.13 現象 土田展子	☆朗読伴奏のみのコレクションテープ60分テープ 2本を一セット(2,000円送料別)で販売致してお ります。
No.22 現正法と転生輪廻 S.55.5.4 講師 岩間文彌	
No.23 A.心の美は(ガブリエル様) S.55.5.11 現象 土田展子 B.「天上界よりの通信」1977年の約束 (ミカ エル様) GLA関西新年講演会 (於東大 阪市民会館)より抜粋	
No.24 第1回慈悲と愛協会総会(ミカエル様メッ セージ) S.55.5.18 現象 土田展子	
No.25 天国語の語源について(ラファエル様) 質疑応答 S.55.6.29 現象 土田展子	
No.26 良い人間関係について(ミカエル様) 質疑応答 S.55.8.10 現象 土田展子	
テープ価格は1本1,200円(送料・消費税は別) 〒150 東京都渋谷区松涛1-4-9 サンエルサビル101号 (株)ジェイアイ出版 TEL 03-5453-1870	